

金瓶梅の素材

P. D. Hanan 原著 荒木 猛 訳

Sources of the Chin P'ing Mei

by P. D. Hanan Takesi ARAKI

はじめに

本稿は、P. D. Hanan の論文 Sources of the Chin P'ing Mei の翻訳である。同氏には、ほかに The Text of the Chin P'ing Mei なる論文があり、氏は、この両論文を1960年にロンドン大学に提出して、博士号を獲得されている。前者は、Asia Major N. S. vol X Part I に、つづいて後者は、Asia Major N. S. vol IX Part I に、それぞれ発表された。

一般に、口語小説研究においては、版本の研究と素材の研究は欠かすことのできない二大柱ともいうべきものであるが、ことに金瓶梅において素材の研究は極めて重要な意味をもっている。

今回訳出した本論文は、それまで、例えば馮沅君女史による若干の研究もあったが、金瓶梅の素材について専らに論じた、初めてのしかも網羅的かつ用意周到な論文である。訳者も、この論文を小野忍氏による訳本（平凡社版「中国古典大系」第33巻）につけられた解説の一文によって知り、大学院生時代以来、多大の示唆と学恩を蒙ってきた。その後、大陸中国において金瓶梅研究熱が高まり、これを研究する学者の増加に伴って、金瓶梅素材の研究も愈々深まり、今では、本論文に補訂を要する箇所も少なくないが、しかし、本論文は今も尚この分野における金字塔であることには変わりがない。よってこのたび、本論文を訳出することを決意した。しかし、訳者は、大学受験以来英語学力の低下が著しく、あるいは英文の微妙な言いまわしの箇所でも誤訳している所も少なくないのではないかと恐れている。読者の叱正を乞うものである。なお、本論文には、徐朔方氏による中国語訳（「金瓶梅西方論文集」1987年、上海古籍出版社刊）があり、随時これを参照した。

1. 小説「水滸伝」
2. 口語短篇小説
- 2 a. 犯罪小説「港口漁翁」
3. 中国文学中における好色短篇小説「如意君伝」
4. 宋代の歴史
5. 戯曲
6. 俗曲
7. 説唱文学
8. 結論

この論文でいう素材とは、「金瓶梅」（訳者注、以下これを「金」と略称する）で使われていて、十分な量として認められている作品をいう。¹⁾ もし私が敢て小説作者に与えたであろう影響についていくつかの結論を持つとしたら、それは素材が素材として認定されて始めてできることであろう。概して私は、筋や人物描写の細部における素材のうち、存在するはずがなかったり、存在するにしても実証できないものについては、本論で論及しない。それが素材であるかどうかは、その本文が単に借用されているということによってかならずしも保証されない。私はそのような素材作品の考察は、素材と認められたものがよく熟考され分析された後まで待つべきだと思う。

これまで指摘されたことのない素材を指摘するのが、本稿の第一の目的である。しかしその中にはすでに指摘されている素材もある。勿論、その中には「水滸伝」（訳者注、以下これを「水」と略称する）のみならず、若干の口語の短篇小説や俗曲なども含まれている。しかし、それらのほとんどは、いつも決まって「金」に光をあてるというよりも、それ自体を解明しようという観点から考察されてきた。それ故に、この論文の第二の目的は、作者によってこれら素材が作品中でどのように用いられたかを分析することである。

素材の探索は、往々学問のうちでも最も退屈で報いられることのない研究作業の一つと考えられてきた。というのは、仮に素材が確定できたにしても、それによって作者の創作方法や創作意図を解明することにはならないからである。しかし、これは、「金」にはあてはまらない。「金」にとって素材の研究——なぜ作者がその素材を選び、その素材を作品中どのように使っているかの研究——は、この小説を理解する上での確かな試金石を提供するだろうからである。中国白話小説の中で「金」ほどこの試金石を必要とするものはない。我々は、本文そのものを除いて外は、この小説の成立過程について何も知らない。また比較できる作品もすくないために、

我々がこの小説に下す結論にはとかく誤りを生ずるを免れない。しかるに「金」に引用された一節を、その元となった素材とを比較することによって、作者自身がどの程度素材を工夫したかを摘出することができ、またそうすることによって、作者の作為を知る手懸りをうることもできる。このような探索は、「金」のほうが他の早期の白話小説より以上に沢山の結果が出そうなのである。

その理由の一つは、他の小説と違ってこの小説の場合、作者によって採用された素材の大部分が今なお現存しているからである。しかし、主なる理由は、「金」が本質的に他の小説と異なるからである。他の小説は、すべて口語の伝統をもっているが、「金」は異なる。

一つの素材を発見することは、単に小説の原始の姿を発見するのみならず、常に一人の作者の想像力をその素材の中に冒険的に求めることができるのである。さらに、中国小説史上おそらく始めて人々は「金」の中より、ある一人の作者の想像力がいかなる人生と文学の制約を受けていたかをみることができる。²⁾

現実の素材の数とその多様性は驚くべきである。俗曲の類いを除いても、優に二十を越える素材が見られる。その中には「金」に利用されるとは思いもよらぬものもある。

時々借用される一節は、極端に込み入った形でまとめられている。例えば、1回では、少なくとも四節か五節が異なった素材から採られていて、それらが一つの物語の中に仕組まれているのである。またその異なった素材をいろいろと様々に利用しているのである。例えば、問答に・筋に・叙述に・人物形象の着想等々にである。甚しくは、作者が素材を別の種類の文学の影響のもとに、小説形式のなかでまったく異なったものに作り変えていることを見ることがもできる。

その小説を説明するにあたって、すべての素材が同じ価値を有するとはかぎらない。例えば、小説の作品中演じられるものとして書き現わされた素材と、その他の素材との間には、明確な違いがある。これら演じられるものとしての素材は、この小説が書かれた時、実際に広く流通していた俗曲なり演劇であったということは、「金」において最も重要な事実の一つである。それらの素材は、小説中において重要な機能を持つにもかかわらず、決まって会話の部分で使われている素材ほどには興味は払われないのである。以下に列举する素材は、全体のうちのどれだけにあたるのか、それを推測するのは不可能なことである。

素材のことを研究する研究者は、とかくある章節が他のある作品から採られたものであるかどうか、それを証明することは不可能ではないかと神経質になりがちである。それは、彼の読書の量と質の点において充分でないことからである場合と、その素材自身すでに存在しなくなっているかもしれない場合との理由からである。

ある部分に明確にある素材が利用されているという推測があっても、更にまだ発見されていない素材の方が本当の素材である可能性もある。しかし、今手に入る素材を研究することによって、少なくとも作中のある要素が作者の発明であるかどうかを判断する基礎を得ることができるという人もいるだろう。

素材を扱うにあたって、二つの課題がある。その一つは、ある素材を確かに「金」の素材と認定しこれを記述することである。今一つは、「金」の中でそれら素材がどのように使われているかを見ることである。この二つの目的を達成する為には、それら素材を、小説中それがどのように使われているかその使われ方によってでなく、素材の種類によって考察する必要がある。そこで以下は、1章から7章までジャンル別に分けて分類し素材を挙げた。最後の8章では、作者による素材の選択から導き出される若干の一般的な結論を述べることにする。

第1章 小説「水滸伝」

「金」の作者が使った「水」の版本はもう存在しない。³⁾ 現存する版本のうち最も「金」に近いのは、1589年(万暦17年)天都外臣の序が附いている百回本である。以下に引用したのは、諸家の注を収めた「水滸全伝」本⁴⁾である。

「金」における「水」からの引用には、次の二種類がある。その一つは、「武松・潘金蓮物語」からの直接引用であり、今一つは、「金」に適用できるように広く採られたその他の章節からの引用である。

イ、武松・潘金蓮物語

「水」の23回～27回で語られている武松の武勇談は、「金」においては、次の三つの部分⁵⁾に組み入れられている。

1回から6回までは、武松物語のうち、虎退治から兄の殺害されるまでが語られる部分である。9回から10回までは、武松の帰還と復讐の試みについて語られる部分である。87回は、彼による金蓮殺害を述べる部分である。「水」の筋からそれる最大の分岐点は、9回である。その時、武松は派遣されていた都から戻ってきたが、すでに金蓮は彼の帰りを待たずに家を出て、西門家の家族の一員に納まっていた。武松は、西門慶を殺そうとして、誤って慶の連れの仲間李外伝を殺してしまう。このように、「金」の作者は、武松による復讐の延期ということによって、「水」中の短い出来事の枠組みの中においてこの物語を自分の小説に最もふさわしい出来事に工夫した。

これらの章節の引用において、「金」の作者は、かなり忠実に「水」の本文に従

いつつも、いつもその引用を自分の目的に従属させている。そして、時々注目に値する削除や短縮を行っている。またこれとは反対に無数の附加した章節もあり、それらの中から作者の態度をうかがうことができる。作中、作者は「水」から引用した人物を時々根本的に異なった人物としている。亦話の技巧面においてとか、小説家の自己の作品に対する対し方といった点において、「水」とは根本的な相違が見られる。「金」における削除の大部分は、できるだけ早く金蓮が興味の中心になるようにという観点からなされている。そして武松に関する事は、できるだけ省かれたり、短縮されたりしている。かくして旅屋における出来事や、武松が虎を退治することができるであろうという可能性を読者がそれによって知ることができる部分は、単純な文章に短縮され、虎との格闘そのものも短縮されている。しかし短縮した文章の中でも、作者は簡単な文句をつけ加えることを憚ることをしないで、動機の細部や、注意を喚起するような文句をつけ加えている。

「金」において「水」と異なっていることで、恐らく見かけより重大なことが一つある。それは、陽穀より清河への変更である。「水」では、武松が清河に向かって出発し、陽穀で兄に出会うことになっているが、「金」では、まったく逆である。これは明らかに故意による変更である。つまり、清河の近隣の街に港町として繁盛した臨清という街があり、この街が「金」のかなりの部分を占めることから考えられたものであろう。これ以上に作者がこの変更したことについて深く考えることは、あまり意味がないかもしれないが、しかし、明らかに彼はこの清河とその周辺の何かについて知っていたに違いない。⁶⁾

「水」からの引用文には、「金」の必要性からより精しい描写がつけ加えられている。一人の人物が、早い章回において西門家の人員の他につけ加えられている。彼女は、武植の可哀相な娘の迎児である。彼女は救いがたくだらない女中で、金蓮からいつも怒鳴られる春菊（訳者注、秋菊の誤り）の前徴のように見える。

これ以外の付加は、作品が「水」からもちだした人物に対する着想の差異になっている。特にその差異は、金蓮と武松とにおいて著しい。もともと「水」に含まれていた金蓮の形象は、「金」において俗語小説である「志誠張主管」⁷⁾にある人物形象に基づいて書き換えられている。「金」中の金蓮と「水」中の金蓮の主なる相違は、その地位と才能において認められる。一人は学問を有する上品な遊女であり、今一人は恐らく無学な女中である。「金」中の金蓮は、前者の経歴と地位とを有している。「金」において、彼女の歌曲や音楽に対する才能は、彼女の読む能力とともに、しばしば強調されている。

他方、武松は依然として「水」中の厳めしくも高潔な好漢ではあるが、彼の復讐の行為にはやや気味の悪い感じがつきまとっている。武松が飲み騒ぐ場面、例えば、

旅屋における描写などは省かれている。そして武松のうちの非情なる復讐者である面のみ強調されている。これについて小さな付加が、この印象を高めるのに役立っている。それは、武松が戻ってきた時に、彼が金蓮に結婚を申し込むことである。読者は、すでに月娘が感じた予兆により、金蓮が夫である武松の手によって殺されるであろうことを知るのである。殺しの場面の細描は、この効果を高めている。「金」の作者は、武松の人物像を超自然的なものにしようとしなくて、単に気味の悪い資質の持ち主であることのみにはアクセントを置いたのである。「金」における「水」の本文に対するかかる付加は、いかに「金」の作者が武松という人物の考えと行動を説明するにかかわっていたかを示すものである。そしてこれらの付加により、武松は「水」中におけるその人物像から遠いものになった。

「金」の作者がつけ加えた付加には、二種類のものがある。一つは、読者に話しかける部分である。例えば、1回で「頭が良く、快活な女性が、ぐうたら亭主と結婚すると、何かと災いが起こりがち」であることを述べた個所がある。亦今一つは、登場人物が自分の考えを述べた部分である。例えば、金蓮が西門慶に出会った後で、「私に気がなければ、帰り際に七八遍も振り返りはなさるまい」と考えたとし、西門慶の方でも、「いい女だな、どうしたら手に入るだろう」と考えたというふうに書いている。勿論、「水」でも、読者に説明的に述べる伝統的手法や登場人物自身がその考えを述べる部分はある。ただ「金」では、より以上の個所が強調されているという点で、「水」とは異なる。

「金」の冒頭部分、即ち「水」に深く依存している部分において、この小説の作者は、我々が“戯曲で使われている曲”と称するものを増補している。これは、中国小説中における新方式であり、恐らくこれは作者による小説芸術における最も重要な発明である。この発明については、以下の第5章で述べるつもりだが、注目に値するのは、この種の曲の引用の必要性が、まったく登場人物の思想や感情を表す為のものであったということである。

性交場面の描写を行おうと考えた作者の情熱は、4回に書き加えられた比較的長い駢語によって窺われる。同様にやはり早い回で作者が念入りに作った一つの冗談が見られる。これら冗談は、この小説における色情描写を考える時には当然考えられなければならないものである。そしてそれら冗談は、作者が読者とともに楽しむ為のものであり、登場人物は一切これに関知しない。例えば、4回には表面上は瓢箪のことを描いた双関の詩があるが、これは、実際には男性性器を描いている。この詩は、この場の場面を背景としている。つまりこの詩は、王婆が隣家に瓢箪を借りにゆくという口実で、実は潘金蓮をよんで来て、西門慶と逢い引きさせる場面に使われている。同様の喜劇的效果をねらった個所は、他の部分にも認められる。例

えば、86回で猫が鼠を追いまわす詩が挿入されているのが、その例である。

政治腐敗に関するテーマ——重要であるのに軽く見られているものであるが——も、「水」の本文に若干の付加がなされることによってそれが強調されている。10回において、知事は武松への告発をみて、逆に西門慶や一連の人々を裁判にかけようとするが、西門慶は、賄賂で知事の上官を操り、結局、事なきを得ている。この部分のみならず他の部分でも、「金」における政治組織の動向に関する描写では、「水」とは何か異なっている。例えば宋江が李師々と不義の恋仲となるという有名な伝説にかわって、「金」では、全く公然たる賄賂や政治的保護、あるいは権力にご機嫌をとる政商の実態などが描出されている。

ロ、他の部分からの引用

他の引用部分からも、見方によっては、それら引用が作者の想像力に基づいて、「水」からいかに選ばれているか、作者が自らの目的の為に採った引用文から、どのような独想力が見られるかを見ることができる。

「金」中の主要人物の一部が、「水」中の人物から採られたことは大いにありうる。作者は10回において、李瓶児の出自として、彼女がかって大名府の梁世傑の妾であったとしている。しかも、政和三年に梁長官の一家の者達が李逵に皆殺しされ、その時に、彼女は高価な宝石類を持って逃げ去ったことにしている。⁸⁾これは、明らかに「水」66回に描かれた大名府に対する襲撃を参照している。梁一家を虐殺したのは李逵だとしているのは事実に反するが、これは、彼が他の誰よりももっともそのような行為をするのにふさわしい人物だと印象づけられていたということである。⁹⁾

梁世傑の妾たちのこと、ことに盧俊義の不貞の妻のことについては、なにも書いていないことは事実である。しかし盧俊義の妻は、彼女の情夫とともに沢山の宝物を持って逃げ去ろうとしたのであり、彼女の性格と行動は、李瓶児のそれに大変似ている。どちらの女性も、夫に無視されている。盧俊義は武芸にふけり、花子虚は女郎買いにふけた。どちらの女性も、その夫を破滅に導くために法律的誤魔化しをわざと見逃し、そのかなりの富を自分の恋人に渡そうとした。それ故に、李瓶児の人物形象は、恐らく「水」のこの部分に基づいて作られた可能性が大にある。

84回では、「水」中のいくつかの話を一つの冒険譚にまとめた意識的な試みが見られる。それは月娘が泰山に詣でに行く段である。少なくともこの段は、「水」の四つの部分に依っている。まず、月娘が拜む碧霞宮娘々の描写は、宋江が42回で夢の中で見た九天玄女娘々に由来する。¹⁰⁾月娘の碧霞宮からの脱出の描写は、「水」中のまったく別な二つの話から採ってきている。「金」の作者は、道士実は女術で

ある男と殷天錫という名うての悪漢とを描いている。殷は、その義兄弟にその土地の知事で高廉という者がいるので、寺院に参拝に来る女巡礼者を誘惑するなどのあらゆる狼藉を働くことのできる人間として描かれている。月娘はまず道士の室におびき寄せられる、そこへ殷が現れ彼女を強姦しようとする。月娘の悲鳴で、ほかの者達が彼女を助けようとする。しかし彼らがそこに到着した頃には、殷も道士も逃げてしまった後だった。月娘の兄は道士の室を打ち破って逃げ口を作る、彼等が山を降りる時も余裕がなかった。というのは、殷が二三十人のならず者達をひき連れ、てんでに刀や桿棒をおっ取りながら彼等を追跡しだしたからである。この殷天錫の人物形象は、若干の出来事とともに、「水」52回より採ってきている。¹¹⁾ 彼は「水」では、地方の暴れ者で、柴進の叔父の土地を欲しが。ある日、彼は刀や桿棒をもった二三十人のならず者達を連れて、その叔父を立ち退かせる為にやってくる。しかしその時、その叔父は気疲れから病を得て死んでしまっていたのであった。殷が柴進を脅かそうとするや、李逵が現れて殷を殺し、更には連れのならず者達まで退かせた。また寺院における誘惑の試みは、「水」の7回より採ってきている。¹²⁾ この部分は高俅の義理の息子が林冲の妻を誘惑せんと試みる段である。この若い道楽者は、高俅の庇護により、世の婦女を誘惑し強姦せんことを公言している。ある日、彼は林冲の妻が寺に詣でている姿を見て、彼女を誘惑せんと試みるが、それは林冲の到着によって挫かれた。その後、今度は林冲の友人の手伝けによって再度誘惑を試みるが、再び失敗に終わる。林冲は騙されたと知るや、大怒してその友人の家をぶち壊す。以上はまさしく「金」に似ていて、寺院での誘惑・家具のぶち壊し・女衞のような真似をする友人・その他種々の文学上の類似点が見られる。そして、どちらの場合も助けを求める妻の悲鳴が描かれている。このようにして、「水」中の二人の悪漢の人物形象が融合せられて、「金」における悪漢は、その名前を一方にとり、渾名を他方に採っている。¹³⁾ しかし、「水」中においてさえ、この二人の男達は共通する一つの要素を持っている。それは彼等がすべて高家との親類であるということにしているということである。高廉は、高俅の兄弟とされ¹⁴⁾ (訳者注、誤り、実際はいとこ)、そして彼は、また結婚によって殷天錫とも親戚関係にある。

寺院から逃げた後も、月娘は別の危険からも脱出せねばならなかった。清河県に戻る途中彼女は好色な山賊の頭目の王英に捕まってしまう。しかし、宋江の取り成しによって見逃してもら。これら故事のすべては、「水」32回から採ってきている。しかし、「水」では、捕らえられた婦人は清風塞知県の妻ということになっている。¹⁵⁾

「水」からの借用部分のうちでもっとも重要なものは、対偶を伴った象徴的文言韻文 (訳者注、これは一般に駢語とよばれている。) で、それら韻文は、¹⁶⁾ 中国小

説の主要な要素の一つである。

時には、駢語をとりまく話の文脈もまた、駢語とともに「金」中に採られている。例えば「金」8回では、殺された武植の霊にお経を唱える為に集まった僧侶達が、いかに金蓮の妖艶な姿を見てうろたえたかを描写しているが、これらは、「水」45回の同じ場面の部分から採っている。その前の読者への語りかけの部分（訳者注、「一字なら僧、二字なら和尚、三字なら鬼楽官、四字なら色中餓鬼」等をさすか？）なども、「水」から採られている。もっとも「金」の方がずっと精巧ではあるが。

しかし、ある駢語は、本来使われていたとは別の状況に使われていることもある。例えば、「水」21回で、宋江とその妻閻婆惜とが夜なか中むつつり向かいあっている場面を描写した駢語は、「金」59回にも使われているが、ここでは、これを李瓶児が病気の我が子のことを思い悩んで毎晩苦しんでいる様子を描写するのに利用している。

「水」から採ってきたもので、作者の考えにより洗練された例が27回に見える。¹⁷⁾ そこでは真夏の極端な暑さが描かれており、詞でこれが表現されている。これに続くものとして、人間身分に関する一考察がある。小作農と旅商人と軍人は暑さを怖がり、これを無かれぞかしと願う。そしてこの考察のおしまいは四行の詩でしめくくっている。このうちおしまいの二行の詩句は、

お百姓さんは気が気じゃないに
左うちわでいる華族さま

詞もこの四行の詩も、ともに「水」16回から採ってきている。この詩は、蔡京の誕生祝いに用意されたものが、途中でならず者達に奪われるという事件の個所で使われている。そしてかの四行の詩は、天びん棒で酒樽をかついで峠を登ってきた男が歌う。どちらの小説においても、この詩にこめられたものは、明らかに極端な政治的不平等に対する抗議の意識である。¹⁸⁾

文字上の借用の外に、¹⁹⁾ 文字を越えた借用がある。例えば、西門慶によるそのパトロンの蔡京に対する誕生祝いは、「水」中の梁世傑によるこの有名な誕生祝いの故事を想起せしめるし、李瓶児の人物形象の原型は、作者の「水」に深く寄りかかっている点から考えて、もっと異なっていたのかもしれない。もっとも、それを立証するのは困難ではあるが。

第2章 口語短篇小説

少なくとも、次の八篇の口語短篇小説が「金」の一部として採られている。このうち的一篇「港口漁翁」は犯罪小説であるから、次の2aで扱うこととして、ここでは、次の七篇について考えてみよう。

- 1) 勿頸鴛鴦会 ……「金」1回に見える
- 2) 志誠張主管 ……「金」1・2・100回に見える
- 3) 戒指児記 ……「金」34・51回に見見える
- 4) 西山一窟鬼 ……たぶん「金」62回に採られている
- 5) 五戒禅師私紅蓮記 ……「金」73回に見える
- 6) 楊温攔路虎伝 ……おそらく「金」90回に反映されている
- 7) 新橋市韓五売春情 ……「金」98・99回と、恐らく1回に見える

これら素材の大部分については、すでにいろんな学者によって指摘済みである。²⁰⁾ 但し、4)と6)と「港口漁翁」は例外である。しかも小説中におけるその用法が徹底的に論じられたのは、一篇の短篇小説についてだけで、²¹⁾ その他の小説は、それぞれの短篇小説自身が考察される時に附随的に述べられているにすぎない。ところで、それがこれまで指摘されたものであろうとなかろうと、それが素材として採られたには十分なる理由があったはずである。

1) 勿頸鴛鴦会

この話は、初期の話本集である「清平山堂話本」²²⁾に残存している。

この話は、淫らな女の不義のことを扱い、彼女が殺される所で終わっている。しかし、話そのものは「金」に採られてはおらず、引首の詞や初めや終りの評論として採られている。この小説の冒頭において採用された詞は、²³⁾ 婦人の力というものは、男を虜にししまいにはダメにしてしまうというものである。偉大なる英雄——ここでは項羽と劉邦——ですら、その破滅から逃れることができなかった。短篇小説では、次にこの詞に含まれている情と色の意味について解説を試みている。以上は、これに続く哲学的短評を伴って、僅かな変更があるものの、「金」において同じ文句が再現されている。しかし、またここから、「金」は短篇小説から逸れ、項羽や劉邦の経歴を述べ、彼等の恋人が彼等にもたらした屈辱等を述べることによって、詞の意味を説明しようとしている。この解説の後、「金」は、また短篇小説に戻る。

「おい、講釈師、さっきから情と色の講釈ばかりしているが、それはどうしてなんだい」

短篇小説では、これには答えないで話を進めるが、「金」の作者はこの問いに答えようとしている。彼の答えの最初の部分は、短篇小説末尾における短評に基づいている。

「金」の作者が自分の小説の冒頭を飾るのにこの短篇小説を素材として用いたということは、大変意義深いことである。このことは、ある程度作者が自分の小説を、一人の妖婦がいて、その色気で一人の男を迷わせ、その男を肉体的にも財政的にも破滅に導く、そうした過度の性欲に関する内容の作品——それはこの短篇小説と同じ構想のものであるが——として作ろうと考えていたことを示している。「新橋市韓五売春情」という小説、これは「金」のおしまいの方に採られており、またたぶん1回における枕の部分にも採られていると思われるが、この小説も同種であって、作者のこの小説に対する構想を示すものと思われる別の例である。

講釈師によって伝統的に採られてきた態度の一つに、警告を発してそのような女に惑わされることから聴衆を離そうとすることがあった。しかし、実際どれだけ真剣に「金」の作者が自分の小説をそのような警世の観点で考えていたかは言いがたい。あるいは、「金」の作者は、講釈師と同様に、人を動かす話には説教的色彩を伴わないと非礼であるというくらいに考えていたのかもしれない。その証拠に、人や家を破滅に導く妖婦は、小説中においてはさしたる位置を占めていない。

金蓮の行為を説明しようとしているところ、とりわけ彼女の絶望的孤独感を表した曲に含まれているのだが、これから、小説の最初の部分ですでに作者の心の中で大変異なった性格概念が作られていたことを知ることができる。

1回3aには、二篇の短篇小説からでも「水」からでも借りてきたわけではない「金」の作者によるこの小説の創作意図に関する短い言説が見られる、それは作者独自の考えのようである。それは、この小説を「風情故事」として描こうとしたとしているものである。これは、この小説のなかで、作者がこの小説をいかなるものにしようとしたかを述べた唯一のものである。

2) 志誠張主管

この話は、初期の話本集である「京本通俗小説」に残存している。そして、「金」では、三ヶ所にこの話から借用した所がある。確かなのは第一回で、その他は、恐らく2回と100回である。(訳者注、この他に、88回陳經濟が王婆の家の門口で揭示を見る段にも借用している)

1回9b-11a には、金蓮の出身素性が書かれている。彼女は元は王招宣の屋敷に

おり、後に張に転売される。ここが「水」による話ととって代わった部分であって、「金」の基調となっている。

この話（志誠張主管）では、一人の金持張士廉が六十才を越えようとするのに子供がなく、ある日、胸をたたいて深い溜め息をつくことが書かれてある。彼は言う、「わしは甚分年をとったが子供がない。財産があったってなんにもなりはせんわい」と。すると、彼の番頭達が、彼に妻を娶ることを進言する。そこで二人の仲人が呼ばれた。ここまでは、「金」中の金蓮の出自の記事に同じである。ただ異なるのは、彼の不平を聞いて、「二人の少女を買って音曲でも習わせ、あんたの世話をさせたら」と示唆を与えるのが彼の妻であるという点が異なる。

この小説中の少女が王招宣の屋敷からやってくる点も、「金」中の金蓮と同じである。ただこの小説では、少女が屋敷内で不首尾をしでかしたからになっている点は異なる。この小説では、王招宣の妻が彼女に嫉妬するようになったことから解雇されるようになっているが、これは、金蓮が二番目の主人の張旦那から解雇される状況に似ている。

この他にも、「金」ではこの小説から借用している個所がある。「金」では、張旦那が金蓮と寝た後どのようにして五種類の衰えが始まったかが書かれているが、この部分もこの小説から採られている。短編小説ではこの部分は、少女が張は若い男だと騙されて来て実際は老人であることを見て肝をつぶす個所に書かれている。

「金」2回9abの王婆に関する駢語は、この小説中の一人の仲人婆さんの描写に非常に似ているし、「金」100回7b-8a 韓愛姐を描いた駢語は、この小説中の女性が主人公に憫れみを乞う段における文句と同じである。

漠然とした類似としては、この小説の中で主人公の母が小夫人を留めおく個所は、「金」で韓愛姐を助けるべく近づく老婆に似ている。

金蓮の出自に関する改変は、比較的重要である。これら改変は、彼女の地位を変える効果をもっている。「金」では彼女は上品で教養あふれる教育された女になっている。これは、ひょっとすると作者が心の中で金蓮に対して深い同情の念があったことを示しているのではないかと思う。短編小説中の少女はと言えば、なにがしか哀れな人間であって、老人に背かれるのみならず若者からも背かれるのである。

3) 戒指児記

この話は、初期の話本集である「清平山堂話本」に残存している。

この話は、若くかつ勇敢な阮華と大臣の娘陳玉蘭の秘密の情事を扱ったものである。二人の密会は、金持や高貴な家々に出入りする狡猾な老尼王守常によってしつらえられる。「金」では、この話を34回と51回で採用している。51回の方では、司

法長官たる西門慶の前に出された犯罪事件の案件として出されている。西門慶は、ここで罪深い尼に鞭を加えてから釈放した旨を述べている。

この小説の採用は、作者が時々早期白話小説を素材として用いていたことを示すであろう。しかし、作者が薛尼の人物モデルをこの小説に借りたには、もっと重要な意義がある。作者の想像力をかきたてたものは、彼女が大家の人間に接近する時の文句であったように見える。彼女は作中頻繁に現れ、西門家の女性達の信頼を集めていた。彼女は貪欲で、抜け目がなく、不謹慎で、時に大法螺吹きで、時に宗教的言辞をはき、時に人を楽しませる人物である。

4) 西山一窟鬼

この話は、「京本通俗小説」に収められている。「金」62回における駢語の二つがこの小説に見られる。もっとも、どちらもこの小説から採られたかどうかの確証はないのだが — そのうちの一つは、別の小説にも²⁴⁾ 見られる。

この小説では、主人公が祟りを払うために道士のお払いをうけ神将を呼びだす。その神将を描く駢語が「金」62回 14b-15aに出てくる。今一つの駢語は、主人公の幻想の中でおきた幻の風を描くもので、「金」62回 16aに同じ文句のものが出てくる。

5) 五戒禅師私紅蓮記

この話は、「清平山堂話本」の中に残存している。²⁵⁾ その大部分は、大部短縮されはしているが、「金」73回11b-14bで薛尼によって語られている。ここでは、薛尼が別に語っている宝巻とは異なって、明らかに話本本来の姿を残している。

これらの「金」中にあっての機能はあまりなく、ただそれ自身娯楽に供する為に採り入れられているかのようである。しかし、たぶん薛尼によって語られるこの話を通じて、何かのアイロニーをこめたかったのかもしれない。

6) 楊温攔路虎伝

この話は、「清平山堂話本」の中に残存している。²⁶⁾ この話は、「水」中の人物や出来事などを思わせるような英雄物語である。「金」は、このうちのチャンピオン勇士李貴の小さな人物形象とだけかかわっている。彼は、廟の祭りで楊温にうち負かされる。

この李貴は、「金」90回1b-2b に同様の状況下で現れる。しかし、決闘の場面はなく、ただ大自慢の長文句をしゃべるだけである。同じような場面なのに、二人の李貴の間での類似は、彼の名前と山東夜叉という字だけである。だから、作者がこ

の知識を確かにこの小説から採ったとは言えないかもしれない。かの腕自慢の長口上も、作者は、別の白話文学ですでに死滅したものから採ったのかもしれない。李貴のことは、もう一度99回8b で述べられている。ここでは、李安がその腕自慢に李貴が自分の叔父だと言っている。

7) 新橋市韓五売春情

この話は、「古今小説」に収められている。²⁷⁾ この話から多くのことが「金」に採られている。それ故に精しくその関係について考える価値がある。

話は、南宋の頃、首都臨安の附近に呉山という一人の若者が住んでいた。彼は裕福な絹商人で金貸しの一人息子であった。彼は地味でよく働き、妻子を持っていた。毎日、彼は父母の居る家から出て本店で働き、さらに村に近い第二店舗に行くのであった。ある日、彼がその第二店舗に着くや、数人の見知らぬ女達が勝手に彼の店の空き部屋に河岸から荷物をあげ中に入れているのを見てびっくりする。彼は始め怒るが、その怒りは、女達のうち一番若い娘から詫びを言われることによってしずめられる。そして遂には、彼女等とその室を貸すことを許す。ところが、その後間もなく、韓金奴というその若い娘は、呉山を誘惑しようとする。彼女は、呉山の髪につけてあった飾りの櫛を掴んだことをきっかけに、彼を二階に誘う。一旦姦通関係が成立するや、彼女は呉山からお金をせびるようになった。呉山の家族は、長い間その女とその母の売春行為を知らずにいた。呉山の留守中、女が客をとるようになると、隣人達は彼女等の評判の悪さを気にし、またトラブルの生ずるのを恐れて、彼女等に迫って力づくで他所に引っこさせようとする。ところが、そのうち呉山は病におちいる。金奴からの手紙を受けとった呉山は、病がなおったと称して家から出て外出することを願う。「金」の作者が、この小説から取材しているのはここまでである。この後、結局どのようにして呉山がとりつかれた祟りから免れたか、いかに彼の妻は彼が助からぬものとあきらめたか、そしておしまい、いかに彼が金奴と出会う前の真面目で勤勉な生活を取りもどしたかをここで述べる必要はない。

この話は、「金」98回5a-13aと、99回1abに採られている。

ある日、陳経済は臨清にある彼の宿舎から運河の方を見ていると、何者かによって上の空き部屋に荷物が運び入れられているのを目にする。彼は怒るが、そこにいた二人の女性のうち若い方の女性を見てその怒りをなくす。丁度その時、年取った方の女性が彼のことを認めた。(実は、彼女は西門家の元番頭韓道国の妻王六児であった。そして若い方の女性は、彼女の娘愛姐であった。愛姐は、かつて西門慶が都にいる蔡京と連絡をとる為に蔡京の妾として送られていた。しかしその後、彼女は西門慶のお金を着服して逃亡した彼女の両親と都で再会していた。) 彼女(王六

児)の夫韓道国も現れ、陳経済になぜ自分達が都から落ち延びなければならなかったかを語る。そこで経済は、彼等がその宿舎にとどまり居ることを許す。まもなく経済と愛姐は恋愛関係になる。経済の妻は彼が外泊することが多くなりだしたのをいぶかしく思うようになる。経済はこれを察知して数日後に妻の元に帰る。すると今度は、経済から金を巻き上げることが出来なくなった王六児が再びかってやっていた売春を始める。他方経済が来なくなったのを悲しんだ愛姐は、経済に手紙を出す。すると経済は、しばらく仕事で来れなかったとお詫びを言って、秘かに愛姐とまた会う。

この箇所(つまり99回1ab)より、「金」は、まったくこの小説から離れてゆく。作者はこの小説のうち、呉山と金奴との出会いと、その後の求愛の部分だけを素材として選んだ。

作者が「金」を作るにあたって、どのような工夫をしたのかを観察することはおもしろいことである。この陳経済と愛姐の話のほんの少し前の頁には、陳経済がいささかの元手で商売をし、一つの酒樓を接収して新たに開店したことを書いている。ところが、この酒樓の話は、小説の後段となんら関係のないものである。つまり、これらの短い話は、この短篇小説をうまく作中に挿入する為に書き加えられた公算が高い。

作者がある小説から採っているもののうち、ある場合は、彼はその小説中における人物概念に囚われていないことを認めなければならない。あの打算的な王六児が、金奴の母にまことに似ていることは本当である。しかし、彼女のこのような性格はこの「金」の中で、とくに確立されていたのである。原人物像に関する限り、彼等の役割はほとんど正反対になっている。例えば、最も名うての放蕩者である陳経済は、呉山とはまったく異なる人物である。また愛姐は、典型的な男たらしの金奴とはまったく似ていない。いつも経済のことを思っている彼女は、「金」の中でも稀に見る貞淑で同情に値する女性として描かれている。

一体、この短篇小説でも「金」に借用されるに値する所があるだろうか。この小説中の波止場の場面が「金」中では臨清の波止場になっており、読者に強烈な印象を与えている。注目に値することは、「金」で借用しているのは、多く写景の部分であるということである。これは、恐らく別の題材から引用するよりいく分容易であったからかもしれない。

男女間の愛情を描写するにあたっては — 短篇小説と「金」とでは主役が違うので、一律にそれを姦通と称することができない — 短篇小説のそれが大幅に借用されており、甚しくは、それより発展させている。男女間往来の書信も借用されている。又正にこれらのことから、「金」の作者はこの小説を借用したとも言える。

この小説より借用した部分は、たぶん他にも見ることができる。それは、1回3abである。作者はここで、この小説の主題について語っている。

それに、この女が死ぬのはどうしてでしょうか。この女を貪る者はみごとに六尺の体を失い、この女を愛する者は莫大な財産を無くし、東平府を驚かせ、清河县を騒がせることになるのです。一体どこの家の女でしょうか。

この小説の開巻部分も、まったく似ている。

それがし今日お話しいたしますは、一人の若者が色欲に対して警戒せず、一人の婦人を恋した為に、すんでのところまで堂々たる六尺の体をこわし、あり余る財産を失いそうになり、新橋市の街を騒がすことにあいなります。

「金」のこの部分は、ひょっとすると別の小説から借用したのかもしれない。というのは、「あり余る財産を失う」という文句は、この小説の全体に適應されるものではないからである。ただ陳経済については幾分当てはまる。彼は財産をはたいて金蓮を買おうとした。ただ、その額は彼にとってそんなに小さくなく、またいずれにせよその売買は成立しなかったのであるが（金蓮が殺された為）。恐らくかかる紋切型の講釈文句は、それまでの男たらしの女に関する話によく使われたであろうから。しかし、この場合は、恐らくこの金奴に関する話から素材として使われた可能性が高い。

第2a章 犯罪小説「港口漁翁」

この話は、1594年（万暦22年）に刊行された「百家公案全伝」²⁸⁾に収められている。その後の版本は、一般に「龍図公案」ないし「包公案」と名付けられている。これは、宋代の有名な探偵兼裁判官たる包拯が扱った犯罪事件に関する話を収めている。この「港口漁翁」の話というのは、次のようなものである。

揚州に蔣奇来（訳者注、誤り、蔣奇が正しい）字天秀とよばれる金持で情け深い人がいた。ある日、彼の所に布施を求めて一人の老僧がやって来た。その時僧は蔣に、近々大災が迫っているがもし用心深く家の中にいて外出を控えればその災難から逃れられる、と警告した。

僧に布施をして間もなくのこと、蔣は董という彼の下男が一人の女中といち

ゃついている所を見て、厳しくこの下男を叱った。そこで、この下男は主人のことを深く恨むようになった。

一ヵ月後、蔣は都にいいところで黄美という男から上京しないかという誘いの手紙を受け取った。蔣は結局、妻の諫めや僧の警告を無視して、上京することにする。春三月、下男の董と琴童とよばれる小者をひき連れて、小舟をやって揚州を出発した。ところが、途中董は二人の船頭とぐるとなり、蔣を殺し、小者を棒でなぐった上水中に投げだした。しかし琴童は溺れず、一人の老漁師に救われて死を免がれる。一方蔣の屍は、清河県の慈恵寺の附近に流れつく。慈恵寺の僧達は面倒のおこることを恐れて、その屍を渚に埋葬した。

ある日、包拯が清河県を通りすぎるや、彼が泊まっていた宿の前に一つの竜巻がおこる。そしてその竜巻が、彼を蔣の屍が埋められている場所に導く。かくて屍は発掘された。僧達は訊問され間違っただけに繋がれる。結局最終的には、琴童が二人の船頭を見つけ彼等を訴える。それで、船頭達は捕らえられ死刑に処せられた。そして代わりに僧達は釈放された。琴童は、主人を正式に埋葬すべくその屍をもって揚州に帰った。董について言えば、彼は捕らえられなかったばかりか、逆に奪ったお金で巨商となった。しかし、あまりにも罪深いことをしたせいで、数年ならずして彼も海賊に襲われ殺された。

この話は、実質「金」の47・48回に採られている。但し、登場人物の名前が替っている。蔣天秀は苗天秀になっているし、董家人は苗青となっている。又小者の琴童は安童に替わっている。包拯は現れない。彼と愚かな知県とが合成されて、役人の狄斯彬という人物になっている。

「金」では、一・二の細かい叙述において、この小説より進歩している。例えば、苗青がたわむれる女を単なる女中としてではなく苗天秀の妾であったとしている点である。こうすることにより、苗青の主人に対する嫉妬や憎しみの情をより表すものになっている。

「金」の作者は、この小説によって政治的ごまかしと腐敗とを描き出そうとしている。例えば、苗青は西門慶に賄賂を贈って無罪放免を得ようとするが、安童がこのことを公明なる巡按御史の曾孝序（宋の実在の人物、以下の4章をみられたい）に訴える。しかし、西門慶の擁護者たる蔡京がすぐこれに干渉する。曾が蔡を告発する上奏を行うや、逆に曾は失脚追放されてしまう。

このようなテーマに関する萌しは、短篇小説では絶えて見られなかった所で、これらはすべて「金」の作者が考えたことである。

「金」の作者は、いずれ苗青が大商人になることをそれとなくほのめかし、また

そうしたことを意味ありげに誇張している。「金」では、苗青も権力者に賄賂をつかうことによって特別の恩恵を受けお金を儲ける西門慶と同じ階層の商人であることを示そうとしている。短篇小説では、そこまでは言及していないのである。

「金」の作者は、この小説を簡単に自分の作品に取り込めるとは考えていなかったと思えるには理由がある。恐らく、そのことにより「金」の筋の上において重大な割け目が生じたのであろう。46回は、西門慶の家族のことで終わっている。ところが、47回はそれまで読者が聴いたこともない揚州の人の話から始まっている。このような例は他には見られない。場面がたびたび変わる最後の十回においても見られないことである。47回冒頭の短い詩と若干の説明とは、読者にこの二つの回における割け目を意識させないように用意されたものであった。このような困難を解決する為の小説家にとっての常套手段は、新しくその場に登場する人物の経歴を述べることであった。もし「金」の作者が、話を先ず苗青が西門慶に賄賂を贈り、それから犯罪がどのように起こったかという短い記事から始めたなら、それは、勿論この話から幾多のおもしろさを削ぐものであり、そう考えたからこそ、恐らくこの作者はそうしなかったのである。しかし、「水」を改作した部分より考えると、「金」の作者は、実際には別のアプローチを好んでいた可能性がある。

「金」の作者の使ったこれら八篇の小説についてその取材における一般的傾向を帰納化することは不可能である。あるものは最初の語り出しに使われ、またあるものは登場人物の形象や筋に使われ、またあるものは人物や場面の描写に使われている。ただ特に、「新橋市韓五売春情」と「港口漁翁」の二篇からは相当多く採られている。しかしこれらの場合でも、引用に際しては根本的な手直しがされなければならなかったのである。後者の話を突然作中にとり込んだことによって、それまで読者が慣れていた話の筋に一つの裂け目が作られることになった。

「金」の語り口は、他の作品の断片を自らに取り組んでもよい程細密である。しかし又、あいまいに描かれている登場人物を除いて、「金」の作者が薛尼や苗青を描くのに彼の想像力をかきたてるには、これら短編小説中における人物形象ではあまりにも不十分であったことも、また事実である。

これら短篇小説からの一節に加えて、「金」には、当時流行していた講釈の一部が材料として使われている。例えば、短篇小説には沢山の詩が見られる。それら詩は通常文脈とは曖昧にしか結びついていないので、それら詩の出典はどこかを言うことはできないし、またそれを詳述することは無意味のようにみえる。修飾的な詩句・詞や対句詩は、もっとおもしろいが、極く稀な例を除いては、それら詩を「金」の作者がどこから引用してきたかが分からない。例えば、82回7aに見られる好色的

詞は、少なくとも三種の異なった短篇小説²⁹⁾に同じように見ることができる。そしてその原典は、元代の戯曲家王実甫の「西廂記」³⁰⁾である。しかし、そのような例は、「水」から引用した詩詞とともに、作者自身の創作であるかどうかについて特別の考慮をしなければならない。

第3章 中国文学史上における好色短篇小説「如意君伝」

「金」の素材のうち最も重要なものの一つに「如意君伝」がある。これはこれまでまだ論及されていなかった点であるが、このことは、この小説が早期好色小説の伝統と関係をもっていることを示している。しかし同時にまた、この小説が成立する以前に編された「如意君伝」が残っていないので、この両者（「金」と「如意君伝」）の正確なる関係を述べることは不可能であることも認めなければならない。

「如意君伝」とよばれる淫らで下品な作品が嘉靖年間（1522–1566）に存在した形跡がある。³¹⁾これは当然、「金瓶梅詞話」の最初にある序³²⁾に言われている「如意伝」と同一作品である可能性が高い。「醒世姻縁伝」巻2で言及する「如意君伝」——ここでは明確にこの小説をポルノであるという意味で引用している——も同じものである。

この小説の主題は、疑いもなく、年をとった皇后武則天と最後の寵臣薛敖曹との情事を描くものである。薛は武皇后より“如意君”という渾名をつけられた。それは、彼が彼女の性欲を完全に満たしてくれる男だったからである。³³⁾

私達にとって、この小説が歴史的事実に基づくことが少ないとか、まったく基がないとか等は、関係のないことである。問題なのは、この小説が「金」が作られた時、正に通行していたということである。

「金」37回10aに見える好色的駢語（「威風迷翠榻、…」）からして、武則天と薛敖曹というのが、当時有名な一对の恋人同志として考えられていたことがわかる。又、17世紀初頭「金」より少し早い好色小説「繡榻野史」にも、ポルノ的誇張表現として薛敖曹のペニスの大きかったことが書かれている。³⁴⁾

私の知っているこの小説の最も早い出版は、1763年（宝暦13年）日本で出版されたものである。³⁵⁾この書の正式な名称は、「則天皇后如意君伝」であり、呉門³⁶⁾の徐昌齡³⁷⁾の作とされる。作品の一番最初のページには、「閨娛情伝」という題がついている。これはまったく文字通りのポルノ作品である。それ故に、この「如意君伝」ないし「如意伝」という作品が、私が今述べている現存する「如意君伝」であることは十分にありそうなことである。

「金」と「如意君伝」との間のテキスト上の関連性を確立する為には、まず「金」

27回における金蓮のエロチック且つサディスティックな一段と、「如意君伝」中の二段の描写との間における類似について記さなければならない。「金」27回12bにおける膺の奥の描写は、ほとんど、「如意君伝」と同じである。³⁸⁾しかし、これは当然かならずしも「如意君伝」から引用したとは言えないであろう。どちらも何か他の、例えば性典のようなもの、から引用しているのかもしれない。しかし、この他にも「如意君伝」より引用している部分があるという事実は、問題なく「如意君伝」は「金」と関係があるように思える。例えば、「金」27回12bの前の文章について、次の文章がある。

西門慶は慌てて、……女を扶け起こすと、女はしばらくして息を吹き返しましたが、西門慶の顔を見つけると、媚びたような泣き声を出して、「ひどいわ、今日のあなたは どうしてこんなにワルなの。あぶなく死ぬ所だったじゃないの。今度からこんなひどい真似をしないでね。冗談じゃなィんだから。今でも頭がツーンとして何が何だか……」と言います。³⁹⁾

これと比すべきと思われる「如意君伝」の部分は、次の個所である。

敖曹は大いに驚き……皇后を扶け起こすと、皇后は甘えたような泣き声で、「これからは、このような乱暴はならぬぞエ、もしつづけざまにすれば、私も死ななければならぬじゃによって……」と言います。⁴⁰⁾

上記のうち、皇后のいう「頭がツーンとして何が何だか」⁴¹⁾が唯一の直接の引文である。この他の対照しうる文句では、いずれも「金」の作者がこの小説を素材として使ったと断定することができないと思う。しかし、これらの対照句より、短篇小説（「如意君伝」や「金」が基づいたと思われる小説）の影響がいかに広範囲であったかを示すということは受け入れられることであろう。例えば、「如意君伝」でも「金」と同様のエロチックな状況が相当沢山あることを見ることができる。どちらの引用部分でも、戸外を背景としている。「金」の場合では、亭子でということになっており、⁴²⁾この小説では、小閣中でとなっている。またどちらも、男が女と交接する時、女が酔ってぐっすり眠こんでいる状態になってから交接に及んでいく点でも一致している。⁴³⁾またこの小説でも「金」でも、何箇所かサデステックなお灸の実際が描かれている。⁴⁴⁾「如意君伝」では、皇后が鳥の交接のありさまを見て、自らの置かれた状況を思うという一段があるが、これは、潘金蓮においても何度か同様の場面を思い起こさせるものである。⁴⁵⁾

更に「如意君伝」のポルノ的描写の主たる点（それは、この小説の存在理由そのものなのだが）は、薛敖曹のペニスの大きさである。彼はこの財産（大きなペニス）を有する為に宮廷に招かれたのである。この小説のエロチックな描写の大部分は、武則天皇后が受けた快楽と苦痛とによって占められている。「金」で強調されているエロチックな描写にも同じような場面がある。少なくとも、それは49回、西門慶が巡礼僧より不思議な薬を得たところより窺われる。

「如意君伝」の「金」の素材としての価値を認識する為には、まずおおまかに二つの異なった色情描写とその違いを知らなければならない。その一つは、省略・間接的描写・ほのめかし・比喩による方法である。それには詩や駢語や対句を個性的に使っている。時々比較的長い韻文によってそれを模擬戦争の描写にまで使っている。この方法の特徴は、あからさまに目に見えるような描写を取りやめたということである。この方法は、他の方法つまり直接的でその目的はできるかぎり直接的経験を思いおこさせようとする写実的方法とはまったく反対である。写実的方法は、通常講釈師と聴衆者を結びつけようとする口頭文学においてすぐれている。それは口頭の伝統を引き継いだ口語文学においてもすぐれている。これに対して、比喩的方法は、読書人階級によって作られた作品に見られるものである。「金」では、このどちらの方法も用いられ、作中には無数のエロチックな詩や駢語（そのどちらもが、口語文学から採ってきたものだが）が見られる。ここが、「金」が好色小説として名声を博している所以である。

「金」が「如意君伝」から素材を得たことの重要性は、文言小説が口語小説に採り入れられたという所にある。このことにより、「金」の作者は古い口語小説と決別して、自らの作品を読書人階級のためのものと運命づけようとしたのである。この「金」がその色情描写の材料として、「如意君伝」やその他これに類似する作品に依っているという点は、過小評価できないであろう。

これら色情描写の詩詞を素材として使っていることは、作者の何かしら余裕ある姿勢を暗示している。そしてかかる姿勢——つまり「金」の中に見られる作者と読者とが共に楽しむ態度——は、短篇小説と明らかに同じものである。

更に私達は、「金」において色情描写の長い文章を日常の対話の中に挿入する傾向も、「如意君伝」の特色であることを記さなければならない。

だが、「金」の作者が短篇小説中の登場人物から影響を受けたということはほとんどない。短篇小説中の人物形象はあまりにも未発達なものである、その登場人物同士の関係は、「金」におけるそれらとははるかに劣っている。しかし、潘金蓮の人物像は、明らかにある小説中の人物で、ハレム宮殿における打算的かつ野心的で放蕩な妾をモデルにしている。例えば、武則天の初期の経歴に関する小説があった

のかもしれない。伝説では、武則天は既にいる皇后を罪に陥しいれる為に、自分の子供を殺すことまでしている。⁴⁶⁾「金」の作者がしたことは、自分の小説に新しい社会状況や商人の一家のことを盛り込むことであった。しかし、それに関して証拠とするにたる具体的資料もないし、その考察は、この論文の範囲を越えている。

第4章 宋代の歴史

歴史的背景については、「金」は「水」以上により実際の歴史に依っている。例えば、西門慶の偉大な庇護者である蔡京は、「水」にも登場するが、「金」48回に見える彼の七件の政治改革案は、その内容や言語とともに実際の歴史に基づいている。また同様に、「金」に見られる張叔夜による宋江の反乱鎮圧は、実際の歴史記録の通りであって、「水」に依らないでいる。⁴⁷⁾しかし、このことは歴史的にすべて正確であることにはつながらない。例えば、蔡京の改革は、⁴⁸⁾著しく歴史的背景に依るものだが、それ自体は虚構である。それらの大部分は、12世紀初頭のさまざまな上奏や詔勅を集めたものである。(訳者注、これら七件の上奏は、いずれも蔡京の提出したものに間違いはない。ただ一時の上奏ではなく、時期の異なる上奏を一度に集めている)

作者は、歴史から取材するにしても、実際の歴史以上にもっともらしさを出そうとしている。しかしそれよりも、作者はその手腕の大部分を、この小説のテーマである政治的腐敗を描くために、歴史的側面の描写に筆を使っている。そして、歴史に由来する事件や人物を通じて、作者の不正やごまかしに対する批判を示している。

不幸にも、作者が取材した歴史書がなんであったかを言うことができない。「金」が取材した歴史書の引用文の大部分があまりに短いので、その素材が正確には何であったかを断定できないことは、驚くにあたらない。しかし、取材したと思われる引用文の多くは、編年風史書、例えば、南宋時代に編集された「皇朝編年綱目備考」⁴⁹⁾や1567年(隆慶元年)にできた王宗沐の「宋元資治通鑑」などに、同じ文章を見ることができる。従って、「金」の作者が実際にその歴史書を参照したとは断言できないかもしれないが、それに類した歴史書を見たであろうとすることができる。

歴史的人物で比較的に目立たない人が、この小説に採られて却って大変重要な人物になっている例が三例ある。

最も顕著な例は、48回で山東巡按御史として登場する曾孝序である。彼は、苗天秀殺害の実相を明らかにするとともに、西門慶ならびにその他の裁判官の悪事を批判する上奏を行う。ところが、蔡京の命令でその上奏はとどめおかれてしまう。そ

ここで、曾孝序は上京し別の上奏をする。この時、彼は蔡京と彼の政策とを批判する。このことにより彼は降職させられた上に、ある陰謀によって遠くに追放されてしまう。この曾孝序は歴史上の人物で、その伝記は、「宋史」巻453に見える。「宋史」における彼に関する記事、蔡京に対する批判、それに伴う降職と追放とは、大体において「金」と同じで、同じ言葉すら用いられている。ただ彼の官職のみが異なっている。

歴史書から引用された他の二人の人物とは、安忱と蔡蘊である。彼等は小説中にあって互いに深くかかわっている。36回3a で、この安と蔡とがともに若くして科挙に合格した人物として読者に紹介されている。そして二人は一緒に西門慶を訪れる。ところが、二人とも科挙の際に変な事件に出くわしている。もともと安忱が状元に選ばれたが、彼の兄の安惇が先朝の宰相で反対派に属しているとして、蔡蘊に状元の席を譲る。後、蔡蘊は蔡京の門下に入る。この不明瞭な逆転劇は、例えば「宋元資治通鑑」巻26・24ab によれば記録の上では崇寧二年（1103）に起きている。この年、李階が科挙合格者のリストからはずされている。その理由は、彼の父李深が旧法党の人間であったからである。そしてこの李階の代わりに安惇の弟の安忱が状元となっている。言葉を換えて言うと、安忱の役割は、「金」におけるそれと正反対になっている。

蔡蘊のモデルは、歴史上の人物である蔡薺である。「宋元資治通鑑」の大観元年（1107）の条によれば、以下のようである。

夏五月、以蔡薺為給事中。薺以諸生試策、揣蔡京且復用、即對曰「熙豐之德業足以配天、不幸繼之以元祐・紹聖之續述、足以永頼、不幸繼之以靖国。……」於是擢為第一、以所對頒天下。甫解褐、即除秘書正字。未踰年、至侍從。前此未有也。

小説中の蔡蘊も同様に、蔡京の門下生であり、不正な方法で状元の地位を手に入れ、すぐに秘書省正字に選ばれ、後まもなく巡按になっている。（49回5aを見よ）このことから、彼は蔡薺がモデルであることは間違いないことである。

第5章 戯 曲

十四本の戯曲が「金」の中で演じられるものとして引用されている。その中には、戯曲の抜粋から引用されたものもある。これらの引用は、他の引用と同じく真実感を増したり、時には登場人物の行動の動機を補足する為に引用されている。それらの大部分は、小説のその部分の雰囲気合っている。これらの引用片段は小説と無関係ではないけれど、素材として非常に重要なものだと考えることができない。とにかく、それらは既に相当精しく考察されているので、⁵⁰⁾ ここでは再びは触れない。

さまざまな戯曲からの曲も、作中唱われるものとして引用されている。それらの曲は、嘉靖年間に出版された唱本には見えないけれども、当時流行し上演されていた曲のようである。套曲の大部分は、元や明初から伝えられたものである。それらは戯曲から採られたものではあるが、中には流行歌として戯曲から独立して当時唱われた。そこで、私達は次章でこの流行歌のことを専門に考察する予定である。「金」に引用されていて特に「金」と深い関係のある戯曲が二本ある。それは、「玉環記」と「宝剣記」である。

「玉環記」

「玉環記」⁵¹⁾ は、実際に演じられるものとして、63回と64回に引用されている。⁵²⁾

「金」に引用されているのは、「玉環記」第六齣の遊廊での場面である。「金」11回にも同じような場面があり、そこには出典は明示されていないが、この戯曲の第六齣からの曲が使われている。この曲は — 妓女李桂姐によって歌われるが — 明らかに娯楽以上の何らかの目的の為に使われている。戯曲では、生の章梈が、優美でものうげな妓女の一人に対して偶然に「拳止従客……」と歌い始めているが、小説では、この曲は少しちがった目的で使われている。まずものうげで優美な李桂姐が描かれ、次に、この時彼女自身がこの曲を歌うこととしている。これは、彼女自身を描くのに効果的であった。作者は、彼女に曲を歌わせることによって、彼女を描こうとしている。作者は、二つのことを一つにしようとしている。彼は心の中でこの劇を思い浮かべ、李桂姐を劇中の女主人公と重ね合せた。このように通常の現実主義的手法を使って、これを別の目的に使おうとする傾向のあることが、この小説から明らかに見てとれる。

「宝剣記」

この劇名は、「金」中においてたえて言及されていない。しかし、この劇は作中に使われている他のいかなる劇よりも重要である。そしてこの劇の各部分が、丁度短篇小説が作中引用されていたように引用されている。しかし、この劇が「金」に使われていたということは、これまで指摘されたことがなかった。そこで、以下にやや精細に説明しよう。

この劇の正式の名称は、「林冲宝剣記」であり、作者は、山東章邱出身の李開先（1501－1568）である。⁵³⁾ 彼自身、流行歌と劇の作家であるが、彼はまた、二人の元代の作家（張可久と喬吉）の戯曲を編集した。さらにまた、六篇の雜劇（うち二篇が残存する）と三篇の伝奇⁵⁴⁾ を作ったと言われている。

「宝剣記」は、その序文より嘉靖26年（1547）に編刊されていることが判る。⁵⁵⁾ この劇は知りうる「金」の素材のうちでも、その年代の言える最新のものである。⁵⁶⁾

「宝剣記」は、「水」とかかわりをもつ物語で、権力者高俅とその義理の息子の高明とによる林冲迫害をテーマとするものである。大ざっぱに言えば、林冲の妻が梁山泊にいる夫と連絡を取ることによって救われるという点を除いてほかは、その筋のすべてを「水」に依っている。しかし「金」に引用された章節は、「水」に本質的に属する事柄とはなんらかかわりをもっていない。作者にとって、それら素材を「金」の素材として引用する必要はなかったからである。以上の理由からと、作者が李開先と同じく山東省の人と考えられていることから、作者がこの劇を引用していることには、特別の意義があるように思えることを指摘したい誘惑にかられる。確かに李開先は、嘉靖年間の文学者の中では口語の文学に興味を示し、その復興を試みた者の中では卓越した人物であった。しかし、「金」の真の作者と李開先のこの二人を結ぶと思える事実は、どこにもない。

全部でこの劇から五段が引用され、「金」の四個所に利用されている。それは、以下の通りである

- 1) 67回に見える二首の俗曲は、劇33出で唱われているものである。
- 2) 70回高俅家の一家来によって唱われる長い独白は、朱勳の富を語る内容であるが、この独白は、劇の3出に見える。またそのすぐ直後にもっぱら娯楽の為に唱われる套曲がある。しかし、この套曲は明確に作者の姿勢を語るものである。この套曲は、劇の50出に見える。
- 3) 61回。これは、若干の附加はあるが、ほとんど劇28出の再現である。
- 4) 79回。これは劇10出の再現である。

最初の例である67回における二首の俗曲については、これまで述べた戯曲から引用された俗曲と同じく、ほとんど考慮するに値しない。しかし、二番目の例は、とりわけ重要である。戯曲では異なった二つの部分に見える二つの曲を、「金」では同じ個所に引用したという事実は、「金」の作者がとりわけこの「宝剣記」を重視していたという証拠である。散文の独白の方は、小説中では駢語のように出ているが、これは高俅の権力と富を諷刺非難する内容である。これが「金」中で駢語として見えるのはなんの不思議はない。というのは、そのような説明的独白は、早期の伝奇劇でこそめずらしいけれども、駢語と同類のものと認められるからである。どちらも結局喜劇か深刻劇かのどちらかに用いられる修辭的美文であり、またどちらも、音の類似と対偶とを重要な特徴とする芸術的技巧に基づいている。

套曲の方は、駢語において書かれた批判を強める為に使われている。それは、劇中にあるのは、梁山泊の謀叛人達に対して恩赦が布告され、高俅と高明とが林冲が復讐できるように彼の前にさし渡される時に見える。この套曲は、林冲によるそれまでの彼の迫害者に対する厳しい非難であり、これを通じて、彼は宮廷でのごますりの悪党や、墮落した政治家に対して非難を浴びせている。ところが「金」では、それらをまったく異なる状況のもと、一見してまったく不適切と思われる所に使われている。朱勳は新たに皇帝より名誉を与えられ、同僚の高官達から祝福を受けている。それら高官の中には、太師の蔡京もいる。異常なことは、朱勳や蔡京ならびに彼等の立場に立つ人々を荒々しく攻撃する内容をもつこの套曲が彼等の祝いの席で呼び物として唱われるということである。この場面におけるこの套曲の使用こそ、作者側の諷刺的意図によるものと見るべきであろう。通常このような場面では、ベタ賛めの賛辞が使われる。しかしそのようなものは、明代の戯曲選集中には沢山見ることができる。事実、この「宝剣記」に見えるものとよく似ている套曲がある。その套曲は、ふしは同じで冒頭の一節の「享富貴、受皇恩」も「宝剣記」に似ている。確かに後者（「金」のそれ）は、その場のパロディを企図したもののようなものである。少なくとも部分的には。この套曲は、非常に有名でよく知られていたもののようなのである。というのは、16世紀前半の曲選中三冊にいずれもこの套曲が見えるからである。⁵⁷⁾ この套曲は、明らかに70回の状況にあわせるように作ってある。というのは、その歌集の一つ（「詞林摘艷」をさす）には、この套曲のタイトルに「上太師」（太師を祝って、あるいは太師に敬意を表して）とあるからである。このように「宝剣記」におけるこの曲は、直接お上へのへつらいと腐敗の暴露を内容とし、それがよく知られた賞賛の曲に似ている限りにおいて諷刺となる。「金」においても諷刺であり、このような筋の中で、かかる曲を配置することは、作者自身による故意の態度表明となる。また同時に、それは作者の側からすれば、作者による自ら

の小説への別の形での介在ということになる。

三番目の例、つまり劇28出のほとんどが、「金」61回22b-24a に採られていることについて、(訳者注、当該部分は、李瓶児の容態が悪化したので、西門慶がいろんな医者をやび、ここでは趙龍崗といういいかげんな医者と対面している場面である) 劇では、この部分はまったく喜劇の場面である。病気になった高明がやぶ医者に診てもらうが、大部分が誤診である。例えば、男の患者たる高明の苦痛は、妊娠によるものであるといった馬鹿げた診断などである。これらの場面は、ほとんど「金」61回における李瓶児が病んで寝こんでいる場面に組み入れられた。ここでのにせ医者趙太医の性格のすべては、戯曲からもってきたものである。彼自身登場する際ある滑稽さを伴って自己を紹介する歌を二首唱っているが、これらの歌は、劇では高明との対話の時に出てきているもので、やはり劇から採ってきている。

「金」では、医者との対話が増やされており、それには下品な言葉による診断まで附加されている。趙太医が自己紹介する韻文の機能は、彼の性格を読者に示すことにある。通常このような喜劇的で下劣な人物像は、このような韻文の形で示される。普通こうしたものを小説中に組み入れることは容易ではない。しかし「金」では、それがちっとも扱いにくいようには見えない。

まず趙太医は、自分の資格について述べ次に詩で次のように述べる。

わしは太医で趙と申し

いつもお客が呼びにくるが……

彼はそれを全部で二十行余り(訳者注、誤り、実際は十六行)の韻文で終えている。その文句は、劇場での聴衆が「聴けば誰もが急に笑いだす」という反応が予想できるしろものである。

「金」でこの韻文を劇中より借用したことは存外の重要性をもっている。それは、この語句と類似の語句が、小説中では別の人物によって唱われる個所が二ヶ所、いや恐らく三ヶ所あるからである。その一は、30回産婆の蔡ばあさんが歌う「私はお産婆蔡とは申す。云々」であり、今一は、40回、仕立屋趙の「あっしは仕立屋趙といい云々」である。そして今一は、恐らく90回で李貴によって語られるカラ自慢であろう。(前述第二章参照のこと) 最初の二例は、趙太医の場合と同じく、自己嘲りの詩句である点で似ている。ある人は、これらの詩句の究極の源が何であったかを言うのをためらうかもしれない。しかし、それらはいずれもこの劇中の手法を借りたものだと言ってさしつかえない程似ているのである。⁵⁸⁾

次にこの医者 of 唱う第二の歌について見てみよう。その一部は、散文の句中に入

っているが、他方、彼が自分自身の薬を自慢する所は、なんら変更されることなく小説中に組み入れられている。つまり次のようにである。

私のところによい処方がございます。こういう薬を飲んでいただきますと、きっとよくなります。ひとつこれから私の申し上げることをお聞きになって下さいませ。

この次に、歌の原文が続く。但しその調子については、しるされていない。戯曲では、この歌は次のように導きだされている。

趙太医「私には薬がございます。その処方成分を申し上げます。」

それから次に、その歌の調子とその原文とが続く。この場面の対話のほとんどの部分が「金」に使われている。例の馬鹿げた診断も、患者が婦人なのでちっとも誤っていない。

第四番目の例は、79回18b-19bに見ることができる。ここには劇10出の一部分が組み込まれている。劇では、ここは奇妙な夢を見た林冲が小者をつかわして占い師をよびよせ、その夢解きをしてもらう場面である。占い師は林冲の運勢を占い、不吉な判定を言い渡す。林はまた夢占の結果をたずねると、またもや不吉な判断を下すという場面である。小説では、西門慶が宿命的病におちいるや、月娘は小者をつかわして、この小説の前の方（29回）ですでに登場したことのある占い師呉神仙と呼びにやることになっている。彼女は先ず呉神仙に西門慶の運勢を占ってもらい、ついで自分の見た夢についても占ってもらっている。呉神仙の下す判断は、いずれも不吉なものであった。ここに出てくる対話のほとんどが、戯曲と同じものである。ただ「宝剣記」には二首の詩歌が見えるが、それは「金」には引用されていない。

これらの引用は、李開先の戯曲から得たものであったにしろ、それよりももっと前の出典より引用したものであったにしろ、これらは、作者によってなされた文学的引用の最も特異なものと言える。彼は、一つの套曲を自作の小説中に引用することによって自己の個性を表明したり、本質的にまったく異なる戯曲中の二つの場面をうまく工夫して小説中に取り込んだりしているのである。

「金」がこの戯曲から引用したことによって言える特徴は、少なくとも二つある。その一つは、戯曲や俗曲を独白や対話に使ったということである。俗曲については、次章で考える予定である。その二つ目の特徴は、登場人物の人物形象に関するものである。我々は既に少なくとも一人の人物趙太医という者の性格がいかにして戯曲

から移植されたか、更にいかに李桂姐と呉神仙とがしばし戯曲中の人物と同一視されてきたかを見た。

戯曲の小説に及ぼした一般的傾向についてのヒントは、小説の弄珠客による序文に見える。彼は序中において、西門慶を大浄（敵役）、応伯爵を小丑（道化役）と規定している。疑いもなく、この指摘は比喻である。「浄」の役割は、往々横暴で、けちで権力的である。「丑」の役割は、彼に対するへつらい者である。⁵⁹⁾ それにしても、特に応伯爵と戯曲の伝統的形象たる丑との比較は巧妙である。彼の傑出した才能は、その悪行を除けば、皮肉っぽい機智にある。彼は、西門慶の過失について後で慶自身が嘲けられていたと気がつくことができないくらい巧みにサラッと述べるができる人間である。彼は、言葉の上で、下女や歌姫や売春婦達とつきあって楽しむのである。例えば、52回で彼は、李桂姐が歌を歌っている間じゅう見当違いの言葉をあびせて、彼女をなぶり困らせている。

以上の考察は — 応伯爵の場合においても — 大部分は憶測にすぎないが、しかしそれにしても、「金」における一般的文学的背景（素材をさす）を研究する際、戯曲が他の特定の素材とは異なり、素材の中でも最も重要な要素であるとして研究することが可能であることを示している。

第6章 俗 曲

「金」において、沢山の俗曲を引用していることは、その最も重要な特色の一つである。このことは外でもなく、作者が16世紀におこった口語文学の発達に強く影響を受けていたことを示す。これまで指摘された沢山の俗曲は、とりわけ馮沅君女史によって、各種俗曲集から見つけられている。⁶⁰⁾ 出典をまだ指摘されていない他の大部分の曲も、同様に「金」が書かれる前から存在していたであろうことは想像に難くない。

「金」に引用されている俗曲は、若干の曲調の名前だけのものや、ほんの数行だけ出ているものを除いても、全部で套曲で二十、小令で百二十ぐらいある。以下これらを套曲と小令とに分けて扱うこととしたい。

套 曲

名前だけのや、数行だけの套曲を除いて、実質的内容を具えた形で引用されているものは、先述の如く二十余ある。このうち十四首は、次の俗曲集に見ることができる。

1.「盛世新声」(1517年刊) 2.「詞林摘艷」(1525年刊) 3.「雍熙樂府」(序には原刊年を記さぬが、この書の刊行年を1566年と記す) 4.「呉歆萃雅」(1616年刊) このうち、1から十の套曲、2からは十二の套曲、3からは十三の套曲、4からは二の套曲が採られている。2の「詞林摘艷」から採られている十二の套曲のうち五の套曲については、その作者名が書かれている。このうち二套曲は、元代の雜劇から抜粋されていた。⁶¹⁾ さらに、元ないし明の作家によるオリジナルな套曲が三首ある。⁶²⁾ それらの作家のうち一番晚い作家は、陳鐸(1488? - 1521?)である。

套曲の多くは、俗曲集の中では、それぞれ特定のものに使うものとして指定されている。例えば、公式の歓迎会であるとか時節時節のお祭りであるとかと。ところが、それら套曲の「金」中における機能は、しばしば俗曲集中の指示に一致する。⁶³⁾ この点において、小説は忠実に16世紀における風習を体現していることは明らかである。うち六首の套曲は、俗曲集に見ることのできないものである。但しそのうちの一首のみは、先に述べた十四首の中の一首に類似している。すなはち、それらは月並みの機会に娯楽の為に歌われるものとして描かれている。それらの曲は、「金」が書かれた時に大変流行していたと思われるのは理由のあることのように見える。

その六首の套曲のうち、93回2b-4bのは、明らかに機能が違う。他の套曲と異なりこの套曲は、小説中において直接話すことにとって代わるという機能を持っている。

陳經濟が乞食達と生活を共にせざるを得なくなり、ある日、かつての栄華の夢から目が醒めて泣き出し、同僚の乞食からどうしたのかと訊ねられて、彼は答えるに、

「おにいさんがた、私の話をひととおりに聞いて下さいよ。次の“粉蝶”の組み曲でそれを示しましょう」

「次の……でそれを示しましょう」という句は、小説中詩から叙述を始める伝統的手法に使われるものである。“粉蝶”は、套曲の最初の曲の調子名である。これは、明らかに元・明代におけるポピュラーな套曲だった。それらのうちの大部分が、「詞林摘艷」巻3や「雍熙樂府」巻6・7に見ることができる。曲は次に、陳經濟がそのたずねた男に向かって乞食としての現在の生活と華やかだった過去の生活、それに不幸とを語る。⁶⁴⁾

このように、語りの代わりに曲を使うのは、小令においては更に一般的である。しかし、ここで、この套曲が「金」の作者によって創作されたと考えることは根拠のないことだと言えよう。小説と具体的に関係をもつのは一首のみで、他の曲はすべて經濟の経歴と冒険とに関するものである。我々がすでに指摘したように、陳經濟の経歴を挿入するのは、作者がよく知っていたこの套曲を小説の中に入れるため

にすぎなかったと言うことも不可能なことではない。

小 令

明代の戯曲から引用されたものを除いて、全部で小説中に百三首の小令が使われている。このうちの四十七首は、一・二の俗曲集に見ることができる。うち二首が、少し文句が違うが小説中において二度使われている。⁶⁵⁾

四十五首の曲は、以下の作品集に散見する。即ち、「盛世新声」より一首、「詞林摘艷」より十首、「雍熙樂府」より三十五首、「新編南九宮詞」より四首、「蕩氣迴腸曲」より二首である。⁶⁶⁾ もう一首別の曲は、冒頭の一節だけを引用されているが、「雍熙樂府」のものと同一曲であることが証明された。

極くまれに、俗曲集の中でそれらの曲の作者名が明示されていることがある。他の五十六首の曲のメロディーも、よく俗曲集に載って説明されているものである。しかし、その中の若干のものは俗曲集に見えない。このことは、これら俗曲集に見えない曲が他の曲と時代的にも地域的にも異なるものであったことを示している。これら他と異なっている曲のうち断然めだつグループは、山坡羊という調子に属する曲である。それらは全部で十五首あるが、いずれも俗曲集に見えない。中には調子名が同じ山坡羊でありながら、実は違い区別しなければならないものもある。例えば「金」に見えるものと同じものが「雍熙樂府」にも見えるのがそうである。⁶⁷⁾

この「金」における十五首の山坡羊の曲と類似のものは、二・三の明代の著作、とりわけ李開先の「詞諺」に見ることができる。⁶⁸⁾ 「詞諺」には、それら山坡羊は、今は伝わらない俗曲集「市井艷詞」（これは「詞諺」と同時代かそれより少し前に編まれたものである）から引用したと書いてある。それらは、「金」にもある通り、明らかに本物の流行歌であり、又極端に口語が使われているものである。李開先は、その「市井艷詞」に序して、この曲（山坡羊）が流行し始めた時期について論じている。

正徳年間(1506-1521)の始めに、山坡羊の曲が流行した。ついで嘉靖年間(1522-1566)の始めに、鎖南枝の曲が流行した。⁶⁹⁾

更に、1603年の序のある後の作品（「天香樓外史誌異」）が、この事実を裏付ける。⁷⁰⁾

正徳末嘉靖初年にもっとも山坡羊がうたわれた。

明代の大部分の俗曲と同じように、山坡羊も独特の主題と情趣とを連想させるものである。⁷¹⁾ そこには、通常怒りやさびしさ、死別等が表現されている。

李瓶児が自分の愛児を死なせたことを悲しむ個所には三首（59回）、又89回における悲しみの場面では四首、いずれもこの山坡羊の曲が使われている。従って、山坡羊も鎖南枝も、16世紀初頭における流行歌だったのだ。しかしこのことは、これとは別の十七首の曲がすべて作者の創作でなければならないことを意味しない。確かに、その中には語りの中にいれられるべきものがある。しかし又別のものは、単なる娯楽の為に唱われたものとは明らかに異なるものがある。⁷²⁾ それらは、当時の流行歌に作者が手を加えた贋作であったとは思ってもよらぬことで、むしろこれらの曲は、作者によって引用された当時の流行歌であった可能性が強い。

また、小説中に二重の意味にとれる曲が四首ある。そしてそれらは恐らく作者の創造と考えられるのである。そのうちの一首は、「雍熙楽府」に見ることができる。⁷³⁾

曲の出典より以上に重要なことは、それら曲の小説中にあっての使われ方の多様性である。それらの半分以上の約五十四首は真面目な形では使われておらず、つまり登場人物の娯楽として使われている。そしてそのうちの若干は、語りの中に組み込まれている。このような曲の使い方は、十六世紀の他の小説にはたえて見られない所である。この事実は、「金」を他とは孤立した奇妙な実験作品のようにしている。しかし、二・三の曲の用法には、十七世紀早期の小説のそれと対比できるものもあるのは事実である。それ故に、いかなる場合でも、これらの使い方は、詩曲が早期小説で伝統的に使われているケースと似ているのであり、作者に大きな独創性を要求することはできない。彼は、せいぜい単に確立したものを別の通行している文学の中に適用したにすぎないのである。曲を諷刺的に使うのも、そのような例の一つである。約九首の曲がこの諷刺に使われている。また四首の曲が、二重の意味をもつものになっている。15回には、そのような曲が二首ある。（どちらも「朝天子」の曲）そのうちの一首は、売春窟で西門慶に^{でくわ}出会した帮間のことをうたったもの（8b）また別の一首は、とり巻き連中が楽しむ様を描いたもの（9b）である。また、歌に具体的内容を盛り込んだ例としては、82回（2a「水仙歌」）金蓮が扇子に書いて経済に贈った曲一首がある。

小説中における曲の独特の使い方として、登場人物が自分の強い感情をこれで示す時に使う場合がある。例えば、20回15abにおける西門慶のやりて婆に対する怒りと、それに対する彼女の答えなどがそうである。亦83回で陳経済によって唱われる曲は、恋愛の感情を強調するものである。侘しさを唱う曲も数多くある。その中には、81回、西門慶に断られた金蓮の悲しみを唱ったもの。52回では、金蓮の拒絶にあった経済の悲しみを唱うものなどがある。死別を唱ったものも多い。その中には59回、李瓶児が我が子を亡くして悲しむもの。また89回、西門慶と金蓮の死を悼

む歌などである。ことに李瓶児の歌には、強い悲哀の要素がある。又79回では、西門慶が死の床にあって、妻月娘と歌のやり取りをする段がある。

短編小説にあっては、文言の場合でも、⁷⁴⁾ 白話の場合でも、沢山の対話が詞の形で表現されている。もっとも、作曲家の感受性と詩人の技巧とが集まった純粋な詞と、「金」に使われているそれとは比較できないが。対話が詞の形で表されていることの唯一確実なる比較は、戯曲との比較である。事実「金」の作者はこの場合戯曲の技巧を真似たかのようである。戯曲中における曲というものは、本質的に強い感情を表す為の手段である。又それは正しく「金」で使われているのと同じ使い方なのである。しかし、「金」中の曲は、詩的に誇張された言語と口語的表現とがまざりあった戯曲中の曲ではなく、その当時の流行歌であった。それ故に、「金」の作者の功績は、流行歌に素材を取ったこと、そしてそれを戯曲的に使用した所にあると言えよう。

戯曲上の技巧は、小説にそう簡単に適用できない。それで曲を戯曲的に扱うについて、作者はさまざまな工夫をしている。それらの中には、これは充分にもっともらしいのだが、ラブレターとして曲を使っているものがある。小説中でこのラブレターの中に曲を使っている例は、全部で六例ある。⁷⁵⁾ そしてそれらは、いずれも流行歌を用いている。

別の工夫は、登場人物が曲を唱うことによって自分の感情を表現するというものである。例えば、1回では金蓮が一人になった時唱う歌（「想当初、姻縁錯配奴」）⁷⁶⁾ がある。この歌により、彼女の絶望的孤独感が述べられている。

しかし大部分の場合は、曲が戯曲的に使用されているという事実も、まぎれもないことである。例えば、79回、死の床にある西門慶が妻に最後の指示をする。妻は泣く。彼が言う。

「まッそう泣くなよ。俺のいいつけることを聞いてくれ、“駐馬聽”の曲にこういうのがあるよ。“利口な妻よ悲しむな、私の心を打ちあけよ……”」⁷⁷⁾

月娘は、彼の言いつけを聴くと、彼女もまた同じ方式で次のように答える。

「どうもありがとう 旦那さま……」⁷⁸⁾

同じように20回。西門慶はやりて婆が李桂姐に別の客をあてがっていることを知るや、彼女にむかって、つぎのように罵る。

ここに、その有様を唱った“満庭芳”の唱があります。「やりてばば、あのくそばば、新手迎えて古手を送り……」⁷⁹⁾

すると、その老女は同じ方式で言いかえます。

「お聞き下さい、旦那さま。もしも旦那が来ないなら、よその旦那に来てもらい、家じゅうその方あてにして、身すぎ世すぎをするまでよ。……」⁸⁰⁾

死別の曲においても、同様の工夫がなされている。例えば59回、李瓶児は、我が子の死を見て、ヘナヘナとくずれ急にワーと泣き出しながら、次のように言う。

「あゝ神様、なぜにまた私を苦しめなさいます。……」⁸¹⁾

そのあとで、彼女は別の婦人達と話し合った後、立ち直り、又次のように唱う。

「いとしわが子はどこいった。……」⁸²⁾

ここに前腔と書いてあるのは、この技巧の出典を示している。勿論、伝奇劇ではこの調子は繰り返すものとして用いられるが。死んだ子供のおもちゃを見るにつけて、また彼女は子供のことを憶い出し。

彼女は再び泣き出してしまいました。次の山坡羊の唱がその証拠です。「部屋に入れば、ひっそり閑。……」⁸³⁾

この他に、もっと込み入ったやり方による曲の引用がある。38回には、部分的には戯曲的に、部分的には叙述的に使われている曲が四首ある。その最初の一首は、⁸⁴⁾ 次のように使われている。

金蓮は西門慶の心をつなぎとめようとして衰弱し、春梅に鏡を持ってこさせる。その時、鏡をのぞきこもうとして、自らのやつれているのを見るのを恐れる金蓮の気持ちを主旨とする詩（「羞对菱花拭粉妝」）をつづけている。その後は、第四曲の前半であり、その内容は、詩の主旨と同じである。西門慶は彼女のうなじを抱き寄せキスをする。すると彼女は、両手が氷のように冷たいと訴える。その後、この第四曲の後半が続く。その曲の中では、切々と自らの孤独の苦しみを訴え、合唱まで続く。合唱部分は、金蓮の自述である。前の二つの部分つまり第四曲の前半と後

半は、ちっともこのようではなく、彼女の内心の描写である。

この38回における曲と同じ問題をもっている曲が沢山ある。その大部分の場合は、それらの曲は、通常「……の文句が証拠」といったお決まりの形をとって出ている。そしてある人物の登場人物に関する初対面の印象を述べている。その登場人物は、語りの形ではなく曲で紹介されている。ある人は、それらが彼の思想と感情を表しているのではと結論するかもしれない。それらは、戯曲中における曲による独白に相当する。それら曲の効果は、金蓮が1回で孤独を嘆く曲や、8回で西門慶の下男の玳安に自らの苦しみを述べる曲のそれとなんら変わらない。それらは、そこで明瞭に記す記述の手数を省いたものに外ならない。それらは、他の曲⁸⁵⁾より一層率直で明白な思考と感情の表現となっている。

小説全体の中で、戯曲的に用いられている曲には、一套曲と約三十首の小令がある。もっとも定義により、その数に変化があるであろうが。⁸⁶⁾ その数は、俗曲集に見えるもののみならず、見えないものも含めた数である。だが、そのような曲のすべてあるいは一部が、作者の作ったものであるとすることはできぬであろう。

「金」において曲を戯曲的に用いる目的については、既に述べた。ほとんどすべての曲の引用は、登場人物の感情が高揚した時になされている。曲のかかる使い方は、作者の登場人物の心理を書こうとする情熱の一面を示しているばかりではなく、明らかにその技法は戯曲を注意深く観察する所からきている。勿論それはまた、中世の散文と韻文のまじった説唱文学からも影響を受けているけれども。

作者の素材の使い方を考察すると、どうしてもいかなる形態の素材から引用したのであるかという疑いがわく。「水」の場合なら、素材は歴史と話本とであり、それらは、間違いなく書かれてあったもの、あるいは印刷したテキストから直接引用したのでなければ、そのようなテキストを記憶していてその記憶から引用している。「金」の作者の場合、戯曲や曲において、実際にその劇を見たり曲を聴いたりしたところから引用している形跡がある。その最もよい証拠は、「宝剣記」の曲を見ればわかる。「金」に引用された曲辞と「宝剣記」の曲辞との間には、無数の相違箇所がある。また「金」の曲辞には、実際に唱われていた形から引用されたということを示すさまざまな特徴がある。それらの中には、同音や同韻による人物の置き換えということも含まれている。「金」に引用されている俗曲と俗曲集との間にも同じ現象がみられることから、作者は、劇を見聞きし、自分でも唱い、空で文句を憶えており、小説を書く時、その記憶によって書いたものであらうと結論づけることができるかもしれない。

第7章 説唱文学

説唱とも講唱とも言われている文学が、「金」の各所に引用されているのを見ることができる。⁸⁷⁾ それらの中には、三種の宝巻も引用されている。⁸⁸⁾ とりわけ、宝巻と道情とは、作中演ぜられるものとして書かれている。⁸⁹⁾

我々の今の目的は、説唱の技巧が実際に小説に適応されている点を指摘するにある。86回8bに、月娘と彼女の下女達が経済を処罰する為に打つ一段がある。経済はそれに腹を立て、自らのペニスをおっぴろげて女達をびっくりさせる。ここの所が次のようになっている。

月娘は経済にひざまずくように命じ、「お前さんは、自分の悪いことがわかってるの?」となじりましたところ、経済はひざまずきもせず、いつもと同様顔を高々とそらしておりますので、その時月娘が言った言葉は、次の長詞がその証拠です。

初めのうちは月娘も、あまりガミガミ言わないで、顔色を変えているばかり、やがて経済、不敵に高く顔あげて「むだなおしゃべりはよしにして、きっぱり二人で話をつけましょうぜ。」……

全曲約二十行、すべて同韻で通してあるが、一行の長さは不揃いである。これは、説唱文学中韻文とはみなせないし、俗曲とも言えない。この他にも、78回に模擬の合戦に托した押韻のないエロチックな長詞がある。ここに説唱の技巧が採用されていることは、疑う余地がない。86回のこの一段も、月娘と経済との対話からなり、曲は語りを進める上で役立っている。それは、すでに套曲や俗曲とはまったく異なる機能を持っている。

第8章 結 論

重要なことは、素材を引用しているという事実ではなく、引用する目的や性格である。より以前の小説より引用するということは、口語小説では当たり前のことであった。例えば、「平妖伝」や「残唐五代史演義」のどちらも、確かに「水」から引用している。⁹⁰⁾ そして、戯曲の分野では、剽窃ということは、更に広く一般的に行われた。

個々に見ると、引用されているものは、それぞれ文学的骨董品ともいうべき妙なまとまりを形づくっている。それらが作品中にあってどのように使われているか、

何故そのように使われなければならなかったかと考える時にのみ、それらは「金」解明に光を投げかけるであろう。

まず注目されるのは、作者が自己個人の観察によるよりもはるかに過去の文学的経験にたよっている点である。引用された過去の作品がごく自然に作者がこの小説を書く時の文学的背景（訳者注、素材をさしている）の一部となっている。その文学的背景が作品に与えた影響がどれくらいのものであったかは驚くべきものがある。作品中で引用の含まれていない部分はほとんどない。私達は、すでに作者が作中の語りの部分に、早期の作品からどれだけのものを仕組んでいるか、その独創力について見てきた。しばしば彼は、早期の作品を素材として、とるに足らない描写にや、人物・事件のささいな描写にまで駆使しこれによっている。もし話中の出来事を、単純に手速く描こうというなら、そんなにもこと細かくかくも面倒なことをするのは問題であろう。かかる考察は、我々をして「金」に関する認識を修正せしめるであろう。その認識とは、ごく明瞭なる例外を除いて外は、「金」は、まったく作者が彼の身のまわりを見渡し、その新鮮なる観察に基づいたものであるというものである。間違いなく、この作品には作者と同時代のことを多く含んでいる。しかし同時にまた、この作者は相当しばしば過去の文学を参照することもしていたのである。

第2に指摘できることは、作者が引用した素材の広さである。引用された素材を見れば、あたかも明代文学の全スペクトルを見ているようで、あらゆるものが引かれている。文学史家は、異なる文学の境界を明確にしようとするかもしれないが、「金」の作者は、この境界を無視しているように見える。

正当と認められた文言文学からは、彼は正史と好色小説の片段を採ってきている。書かれた口語文学の分野からは、彼は、長篇小説のみならず短篇小説からも採っている。戯曲と同じように、これらの二つの形式（長篇と短篇）は明らかに作者の想像力と近かった。ある情景のほんの少しの暗示だけでも彼を引きつけるに十分であった。当時流行していた口頭文学からは、彼は俗曲を素材として採用している。そして、若し説唱文学の片段そのものを素材としているのでないとしても、少なくとも説唱文学の技巧を取り入れている。

このような自由自在の取材は、さまざまに異なる文学の方法を好んで駆使することによってなされた。説唱技巧を伴った試みもその一例にすぎない。

今一つ作者が新たに開拓したことは、既に3章で述べたように、自己の作品を聴衆に対するものとしてでなく、読む人々に対するものとしたことである。結果として、我々は、「金」をある文学伝統の中にいれることに用心しなければならぬであろう。この作品は、さまざまに異なったものの影響を豊富に受け入れている点にお

いて著しいものがあり、それ故我々は、この作品を従来の文学形式に従っているものと言うよりも、勝っているものと言うことが出来るであろう。

もし、素材の引用の仕方の探究から、小説のいかなる面が洞察できるかと問われたならば、これは十分に逆説的ではあるが、それらは不完全ながらも作者の創作目的に関して示唆を得ることができるといことである。作者が何に不足を感じ、それで素材を使っているか、作者が読者に何を与えようとし、それに不足を感じ素材を使っているかを見ることによって、我々は正にそこに作者の独創性を見ることができるのである。

この小説の基底でのまとまりは、その特徴の一つに挙げられる。「金」は、明確にそれ以前の小説よりも一層語りに密着した小説である。その結果として、小説の冒頭から「水」から離れて独自の筋の展開をさせることは、著者にとって不可能なことであった。しかし、いかなる話も、著しく緊密な構造をもつ「金」の中に素材として組み入れられる時には、それがばらばらにされないわけにはいかなかった。

(場所においても、時においても) 語りが弱くなっている個所においてのみ、素材としての他の小説をうまくとり込むことが可能になっている。例えば、84回月娘の巡礼の旅の個所や、最後の回における経済の悪漢ぶりを描いている個所などである。「新橋市韓五売春情」ですら、その筋の大部分を犠牲にすることによって、素材としてとりこまれている。唯一の例外は、「港口漁翁」である。そしてこれは他のものより際立っている。それは古めかしく、エピソード的なものではあるが。「金」に完全に受け入れられ、又それが作中めだっている。それは、小説がこの点で読者に印象づけるほどそれが作品全体の構成を犯しているからである。私達は、作者が自分の作品をエピソード的小説から離すことができなかった為に、作中にこの欠陥を残すのを許すことができたのであらうと推測できるのみである。

同様に、作者が小説の冒頭あたりで、妖婦に関する一・二の故事を引いていることも大いに重要である。妖婦小説としては、「金」は絶望的なほど不適當な作品である。しかし明らかにそれらの故事は、作者が作った新しい種類の作品と唯一対照しうるものでもあった。

この新しいタイプの作品は、登場人物をもっと精しく描写することを望み、またそれ以前の小説より細部において異なっていることを望んだ。「水」や、当時の俗語小説や戯曲から引用した登場人物は、作者の目標からは不十分なものであった。それらは、架空の人物 — 例えば、戯曲からのやぶ医者や如き — の作中における残存を許しているか、そうでなかったら、それまであまりよく知られていないものを正確に描写しているかしているのである。そしてこの描写は、往々登場人物の社会的地位に関するものである。⁹¹⁾

しかし、作者は革新的な技法を駆使して、登場人物に別の大きさを加えようと試みている。これは、戯曲の技法を学び、俗曲を駆使することによって登場人物の心理状態を描こうとする一種の実験である。この技法は一様にはなされてなく、その事の成否の評価はともかく、それはまったく革新的な進歩だと考えられる。

その技法以上に重要なことは、その技法の背後にある作者の創作意欲である。この創作意欲により、人物描写の面において、従来見られていたものをはるかに越えることになった。

おしまいに、素材の研究から作者自身の考えや作者の読者に対する態度をかいま見るができるように思える。私達はすでに作者が好色短篇小説を使い、二重の意味をもつ詩句を引用することによって、彼の好色に対する態度を見た。そしてこれは、唯一の例ではない。例えば、彼の作とされる70回における皮肉的な表現等もそうである。表面的にはおきまりの称賛をしながら、同時にそれを皮肉的攻撃の材料ともしていたのである。

注

1) 本文は、拙作「金瓶梅の成書及び其の来源研究」をもとに1960年ロンドン大学に出した博士論文である。

以下の引用は「新刻金瓶梅詞話」よるが、第53回～第57回は原作ではない。

精しくは、拙作“The Text of the Chin P'ing Mei”(金瓶梅版本考)を参照されたい。

2) これは一種の仮説であるが、たぶん事実であろう。作者がいかに素材を引用しているかの研究によって実証されるであろう。ある人は「金」は直接口語文学から発展したものであると考えている。しかしこの説は証拠こそないが反駁されなければならないだろう。事は、潘開沛・徐夢湘の二文(「明清小説論文集」1959年北京版所収)に見える。

3) これは、引用された文章が、いずれも現存するどの版本のそれにも類似しないという事実から知ることができよう。拙論“A Study of the Composition and the Sources of the Chin P'ing Mei” P121-123を参照されたい。

4) 鄭振鐸整理、1953年北京刊本。

5) 三つの部分とは、以下の部分である。

1. 「金」1回3b～6回4aは、「水」のP341～401、P405～407 より、
2. 「金」9回3b～10回5aは、「水」のP407～418、P423～426 より、
3. 「金」87回1a、5ab、8a～10aは、「水」のP415～416 より、

それぞれ引用されている。

6) 明代ここに大きな皇帝の煉瓦工場があった。宋応星「天工開物」P137を見よ。

7) 以下の第2章を参照されたい。

8) 10回7aを参照

- 9) 実際に虐殺を行ったのは、杜遷と宋万であった。
- 10) 「金」84回3aは、「水」P678から採ったもの。又「金」84回2ab寺院の描写は、明らかに「水」P1243-1244から採ったもの。
- 11) 「金」84回の3a-7b、10aは、「水」のP858-860から採っている。
- 12) 「金」84回の3a-7aは、「水」のP113-116から採っている。
- 13) 彼は、「金」84回の3aでは、殷太歳とよばれている。別の男の名前は、「水」では、花々太歳と名付けられている。「水」P113。
- 14) 「水」P858を見よ。
- 15) 「金」84回の8a-9bは、「水」P501-506から採っている。
- 16) これらには、これまで一般に認められた中国文学上の術語がないようである。ここでは、これからそれを、「駢語」と呼ぶことにする。そして時々それらは、賛とか讃、または賦とか詩とかと呼ばれている。以下に「金」における駢語と、「水」中の類似句を挙げてみる。
- 「金」2回5aは、「水」P723より、
- 「金」8回11abは、「水」P734-735, 739より、
- 「金」9回2bは、「水」P357より、
- 「金」11回8abは、「水」P840より、
- 「金」14回5aは、「水」P194より、
- 「金」15回2b-3aは、「水」P516より、
- 「金」30回6bは、「水」P193より、
- 「金」59回13b-14aは、「水」P312-313より、
- 「金」61回21bは、「水」P858より、
- 「金」66回4abは、「水」P882-883より、
- 「金」81回3b-4aは、「水」P474-475より、
- 「金」84回2abは、「水」P1243-1244より、
- 「金」84回3aは、「水」P678より、
- 「金」86回7aは、「水」P126より、
- 「金」89回6abは、「水」P102より、
- 「金」89回7aは、「水」P732より、
- 「金」93回12aは、「水」P618より、
- 「金」100回10bは、「水」P474より、
- それぞれ採っている。
- 17) 「金」27回2b-3bは、「水」P229-230から採られかつ洗練されている。
- 18) 「水」には、已に失われた話本が入っているという示唆がある。王利器「水滸伝所採用的話本資料」「水滸研究論文集」P312-313参照。
- 19) 少なくとも8句から10句の韻語が、「水」と「金」の二書に同時に見える。例えば、
- 「金」10回の韻語「朝看瑜伽經」は、「水」45回より、「金」18回の「堪嘆人生毒似蛇」は、「水」53回よ

り、「金」19回と94回の「花開不折貧家地」は、「水」33回より、「金」68回の「芳姿麗質更妖嬈」は、「水」81回より、「金」88回の「上臨之以天鑒」は、「水」36回より、「金」89回の「風拂烟籠錦旆揚」は、「水」3回より採られている。しかしこれらのうちのあるものは「水」以外の別の所から採られた可能性がある。これら冒頭詩と正文との関係は緩くあまりない。この他二十余りの詩も二書に同時に見えるが、今一々挙げない。

20) 1947年北京刊「古今小説」巻2、P444-455に呉曉鈴の研究があり、上記のうち3)・5)・7)を指摘している。小野忍は、1959年訳本金瓶梅巻1、P312で、1)・2)について指摘している。

21) 7)についてである。J. L. Bishop “A Colloquial short story in the novel Chin P'ing Mei” HFAS(1945) P394-402を参照されたい。

22) この名前は、洪楗によって16世紀中葉出版された叢書の一部で、その残存しているものにとりあえず便宜的につけたものである。そしてこの書名は、晁瑛(1560年没)の「宝文堂書目」に書かれている。

23) 同詞は、「初刻拍案驚奇」巻32冒頭でも使われている。しかしこれに伴う評論は異なる。

この詞の作者は、宋の卓田(字は稼翁、「全宋词」四P2481)である。馮夢龍「情史」巻1“美人虞”の条にも同詞が引用されているが、各テキスト間には小さな異同が見られる。

24) 「洛陽三怪記」に見える。

25) この書名は、「宝文堂書目」にも見える。紅蓮に関する口承が杭州において嘉靖年間に流行していた。田汝成「西湖遊覧志余」巻20を見よ。

26) 楊温は、「楊家将」物語の楊継業將軍の孫である。宋・羅輝「醉翁談錄」(1957年上海版) P4に見える“攔路虎”は、恐らくこの一篇であろう。

27) 呉曉鈴前掲論文(注(20)参照)では、「宝文堂書目」に載する“三夢僧記”がこの一篇を指すのだろうとする。また Bishop 前掲論文(注(21)参照)では、これと「金」との関係について精しく論じている。

28) 10巻100回、その正式の書名は、新刊京本通俗演義全像百家公案全伝である。この版本は、名古屋の蓬左文庫に保存されている。李田意「日本所見中国短篇小説略記」『清華學報』New Series1・2巻、1957年4月 P79参照。

29) それは、1、「国色天香」に収められている「張于湖記」、2、すでに見た「戒指児記」3、「古今小説」巻38の「任孝子烈性為神」である。

30) 4本1折。(訳者注、同詞は当該戯曲には見えない。たぶんハナン氏の誤りであろう。)

31) 孫搢第「中国通俗小説書目」1957年北京版、P153-154を見よ。尚、陳天池の72回「如意君伝」は、19世紀に書かれたもので、別の作品である。

32) 欣々子の序。この序には二種類の小説が挙げられている。第一類のものは、15世紀にまでさかのぼるもの。(訳者注、唐・元稹の「鶯々伝」をさしている) 第二類のものは、後世出たもので、具体的に挙げられている「如意伝」や「于湖記」である。

33) この小説によれば、皇后は薛敖曹を得たことを祝って、年号を如意(AD 692年)に変えたという。私は、この如意という名前には“僧侶のつえ”とか“孫の手”といったような洒落の意味があるようにも思える。

34) R. H. Van Gulik の“Erotic colour prints of the Ming period”巻三を参照のこと。この書は、1951年東京

で秘密裡に出版された。

- 35) この書は、今東京大学東洋文化研究所に長沢文庫として保存されている。出版者は、小川彦九郎になっている。
- 36) 蘇州のこと。
- 37) 私は、これ以上彼のことについて知らない。
- 38) 「如意君伝」では、「直抵牝屋之上、牝屋乃婦人深極之处、有肉如含苞花、蓋微析男子垂首、至其处、覺其翕翕然、暢美不可言」とあり、これは、「金」27回12bの「直抵牝屋之上、牝屋者、婦人牝中深極处、有屋如含苞花蕊、到此处、無折男子莖首、覺翕然、暢美不可言」と、そっくりである。
- 39) 原文は、西門慶慌了、……于是把婦人扶坐。半日、星眸驚閃、甦省過來。因向西門慶作嬌泣声、說道、「我的達達、你今日怎的這般大惡。險不喪了奴之性命。今後再不可這般所為、不是要处。我如今頭目森森然、莫知所之矣」である。
- 40) 原文は、赦曹大驚、……扶后起坐、久而方甦。……（后）作嬌泣声曰「茲復不宜如此粗卒、倘若不少息、我因而長逝矣、である。
- 41) 原文は、頭目森森然、莫知所之矣である。
- 42) 「金」27回8回aで、金蓮が亭子にゆこうと言う。
- 43) 例えば、「金」29回12a。
- 44) 例えば、「金」78回他。
- 45) また、この兩作品（「如意君伝」と「金」）に使われている好色的空想は、極めて似ている。
- 46) 「新唐書」巻76参照。
- 47) 例えば、新貨鑄造のことに関しては、王宗沐の「宋元資治通鑑」巻20を参照されたい。
- 48) 蔡京の伝記は、「宋史」巻 353に見える。
- 49) 陳均編。1936年東京・静嘉堂文庫より複製本が出された。
- 50) 馮沅君「金瓶梅詞話中的文学史料」、「古劇説集」1956年北京刊 P180-217
- 51) 「六十種曲」所収
- 52) この戯曲から引用された部分の詳細については、周貽白「中国戯劇史」1954年上海版 P371-372 を参照されたい。
- 53) 八木沢元「明代劇作家研究」1959年東京、P172-268に、李開先に関する論述がある。
- 54) 「宝剣記」の外に、あと一篇「断髪記」が残っていて、この孤本の完本は、京都の神田喜一郎が所持している。
- 55) この本を影印したものが、「古本戯曲叢刊初集」1954年北京刊に収められている。
- 56) 李開先の蘇州の友人で雪簑漁者と号する人が、「宝剣記」序文で、「或いは、坦窩が之を（宝剣記のこと）を書き始め、蘭谷が之を書き継ぎ、山泉翁が之を修正し、中麓子（即ち李開先）が之を完成したと言われている。」と書いている。しかし、彼のこの説はまだ信ずることができない。李開先がどの程度「宝剣記」の作者であったのかははっきりしない。また坦窩等の状況もはっきりしない。彼等は当地の劇作家であったのかもしれない。王世貞の「芸苑卮言」に依れば、李開先は「宝剣記」の改編者だとする。以上の二説は大変近い。

雪簑漁者の序にまた言う、「作者が誰だかわからない。私はかつて東国に旅行した時、『宝剣記』をうたう者の多いことに気づいた。特に章丘においてこれが甚しかった。或いは、章人がこれを作ったのではなかろうか」と。別の可能性も考えられるが、これもまだ信じられない。注53に引く八木沢元の書 P265 では、「宝剣記」序末に附注があり「これは、雪簑漁者原作、李開先改編」とあるとするが、彼が引用しているのは、内閣文庫蔵本「閑居集」である。1959年北京から出版された路工編「李開先集」では、抄本にはこの序が無いとする。「宝剣記」は、1547年に完成出版された。事は、徐扶明の「李開先和他的林冲宝剣記」『元明清戯曲研究論文集』1959年北京再版 P288-289 に見える。

「宝剣記」には、若干の北曲套数が含まれている。例えば、第50出には南北套数が各々一曲づつある。「金」がこの戯曲から引用している曲も南北ともにある。第50出からは北套曲を、第28・33出からは南曲を引用している。「金」の作者が見た「宝剣記」は、少なくとも李開先本と大体同じであったことが判る。あるいは李開先本そのものだったのかもしれない。戯曲成立の状況がはっきりしないので、これもはっきりしない。

57) 1.「盛世新声」1955年 北京刊 1a

2.「詞林摘艶」1955年 北京刊 辛集 11a

3.「雍熙樂府」「四部叢刊」所収卷3 2a.「詞林摘艶」では、この套曲には「上太師」という題がつけられ、作者は、明の邱汝成だとしている。

58) これらのことに注意を払った唯一の学者は、馮沅君である。前掲書 P183-185 参照。彼女は同書で、それらを「金」の前身の痕跡ではないかと仮定している。韻文と散文を互用する講唱文学に「金」は似ており、その前身は講唱文学ではなかったかとする。しかし、事実はこちら詩句が一つの戯曲から取材されているので、この突拍子もない考えはまだ疑わしい。

59) 明戯曲におけるこれら二つの役割に関する論考は、鄭振鐸「浄与丑」『中国文学研究』1957年刊 P559-577 を参照されたい。

60) 彼女のリストは、「金」の作者が引用した範囲を指摘するのに多大の貢献をしている。しかし今ではいろんな点で全く不十分である。例えば、P203 で公然とそれらが小説中で唱われるものとして示されていないとの理由から、十二支の曲の出典を挙げることを省いたと言っている。だが、それら省かれた曲は、あちこちの俗曲集に見えるにもかかわらずである。戯曲から引用したものについても触れられていない。そこで、私は以下に訂正と附加を行い、リストアップした。

〔套曲〕70回13abの套曲「享富貴、受皇恩」は、「宝剣記」から取材したもので、俗曲集からのものではない。(前章参照) 42回9b-10aの套曲「鳳城佳節」は、「雍熙樂府」(以下「雍」と略す) 卷11からで、馮君の指摘した卷13からではない。71回3a-5bの套曲「水晶宮、鮫綃帳」は、「詞林摘艶」(以下「詞」と略す) 辛集からであり、丙集からではない。77回8b-9bの套曲「想多嬌」は、「雍」卷9のみならず、「詞」己集にも見える。「金」においてこの他にみられる十四の套曲のうち、十は、他の俗曲集とともに「盛世新声」においても見ることが出来る。しかし、馮女史がこのリストを作った時、この書は利用できなかった。

〔小令〕以下のものを馮氏のリストにつけ加える。4回4bの沈醉東風の曲は「雍」卷17に見える。6回7aの両頭南の曲は、「詞」甲集に見える。8回2aの二首の曲と、同回4aのいずれも山坡裡羊の曲は、「雍」卷20に見える。三番目の曲は、また82回1bでも使われているようである。8回4b、82回1bや83回1bで使われている三首の寄生草の曲は、「雍」卷19に見える。11回9bの水仙子の曲は、「雍」卷18に見える。12回2bの落

梅風の曲は、「雍」巻20に見える。12回3bの朝天子の曲は、「雍」巻18に見える。38回12bの二犯江兒水の曲は、「詞」甲集に見える。65回15bの普天楽の曲は、「詞」甲集・「盛世新声」戊集に見える。80回5bの折桂令の曲は、「雍」巻17に見える。82回3ab、3bと83回6bの河西六娘子の曲は、「雍」巻20に見える。82回4b、83回10b、85回8abの四首の紅綉鞋の曲は、「雍」巻18に見える。94回12bの四塊金の曲は、「詞」甲集に見える。加えるに恐らく19回3aの折桂令の曲は、「雍」巻17に見える。

〔戯曲から引用した曲〕五章で述べた「玉環記」や「宝剣記」の他に述べるならば、27回7aと8bの梁州序の曲は、「琵琶記」第22出から採られている。

- 61) 41回4a-5aの套曲は、喬吉（1345年死す）の「兩世姻縁」三折の曲である。71回3a-5bの套曲は、羅貫中の「龍虎風雲会」三折の曲である。
- 62) その三首の作者は、以下の通り。58回13bの套曲は、元の杜仁傑の、65回14aの套曲は、明の朱有燬（1379-143）の、73回3b-5bの套曲は、陳鐸（字大声）のそれぞれの作である。
- 63) 例えば、65回14aで新しい巡按官の黃太尉を迎える時の套曲は、「詞」己集では、「上文臣」（文官の榮譽を祝して）と指定されている。又42回9b-10aの套曲と58回13bの套曲は、それぞれ灯籠祭りと七夕祭りを祝う場面で使われているが、これらは、「詞」の戊集や庚集に指定されている所とすこぶる一致してる。
- 64) かつて華やかな生活を送った乞食が、通行人に自分の不幸を語るというのは、中国の戯曲・小説にあつては、極めてよくあるパターンである。
- 65) それは、19回3aと52回19bの「折桂令」曲と、8回4bと82回1bの「寄生草」の曲である。
- 66) 後の二書は、入手できないでいる。馮沅君前掲書に見える。
- 67) 8回2a・4bに見える三首は、「雍」巻20にも見え、同じように山坡羊と称している。
- 68) 路工編「李開先集」1959年北京P946を見よ。有名な著作者にも若干の類似の曲があるが、たぶんそれらは流行歌の贋作であろう。それらの一部は、朱載堉（1563年生）の「惺世詞」や趙南星（1550-1627）の「芳茹園楽府」に見ることができる。前者の一部は路工編「明代歌曲選」1956年上海を見よ。また後者については、「趙南星集」や盧前「清都散客二種」1935年を見よ。
- 69) 「李開先集」P320年参照。
- 70) 「天香樓外史誌異」（序の日付は、1603年になっている）を見よ。これら俗曲に関する秀れた研究は、葉德均「明代俗曲序論」を見よ。これは、上海「大晩報」の1948年11月19日より2月23日までの通俗文学の頃に掲載されたものである。
- 71) 例えば、朝天子の曲はほとんど諷刺の為に使われている。
- 72) 例えば、50回7bの一曲は、売春窟における歌姫によって唱われるものとして描かれている。
- 73) 例えば、12回3bの一曲は、表むきは茶について言いつつ、同時に歌姫のことについての意味も含ませている。応伯爵が唱うこの曲は、「雍」巻18、21aに見える。
- 74) 例えば、丘濬（1418-1495）の「鐘情麗集」など。これは明らかに16・17世紀にあつて非常に普及した文言小説集であつて、「国色天香」に収録されている。
- 75) 8回4b、12回2bの二曲、82回1b、83回1b・7b、85回8aの六例。
- 76) 1回11b-12a
- 77) 79回20b

- 78) 同上
- 79) 20回15ab
- 80) 20回15b
- 81) 59回16a
- 82) 59回21a
- 83) 59回19b-20a
- 84) 38回8bの曲
- 85) 例えば、83回6b-7aの下女の考えを述べたものや、82回10aの金蓮の反発を表したものなどである。
- 86) これまで述べたものの他には、次のものがある。19回3a、経済の悲しみを述べたもの。83回5a-6aは、金蓮が下女を通じて自らの恋情を経済に述べたもの。83回6bは、金蓮が下女に経済あての伝言をことずけるもの。83回8bは、金蓮が経済に対して寂しさを訴えたもの。83回10bは、金蓮と経済とが一緒にこの曲を作ることによって彼等の気持ちを表しているもの。91回13bは、李衙内の妾が李衙内の彼女に対する対する扱い方に関して不平を述べたもの。82・83回において、それぞれ七首の小令が使われているが、それらは金蓮と経済との恋愛を扱っており、形の点で、小説の他の部分と異なる。
- 87) 勿論、少なくとも何篇かの口語短篇小説でもとは説唱文学であったと思われるものが「金」に引用されている。「水」も、結局説唱文学から発展してきたものである。実際「刎頸鴛鴦会」には、まだ鼓子詞の形跡が残っている。こうした説唱文学は、宋代に盛んであった。—— 葉德均「宋元明講唱文学」1957年上海P8参照。—— しかし「金」が書かれた頃には、書かれた口語文学が相当占めるようになっていて、作者も説唱ものではなく、書かれたものを知っていたにちがいない。—— 彼は、勿論「水」のみならず、16世紀当時流行していた口話小説も知っていた。—— ここで説唱というのは、このように書かれるようになった時代にも存在した、基本的には身ぶり手ぶりにたよる文学を指している。
- 88) それは、39回14b-16bの「五祖黃梅宝卷」、51回17b-18bの「金剛科儀」、74回11b-27bの「黃氏女宝卷」の三種である。他にも薛尼が宝卷の方式で語るものもある。「金」における宝卷の研究については、沢田瑞穂「金瓶梅詞話所引の宝卷について」「中国文学報」5号、1956年9月を見よ。
- 89) 82回5aに、原文は引かれていないが、「紅羅宝卷」というものが出ている。道情という言葉には二つの意味がある。その一つは、道教徒にかかわる訓戒的な曲という意味と、今一つの意味は、説唱の形を採った道教徒の話という意味である。葉德均氏前掲書P24には、「金」中に見られる道情二種を指摘している。その一は、64回7bに見える「韓文公雪擁藍関」で、これは韓湘子と関係のある話である。今一つは、同回に見える「李白好貪盃」である。この他に、15回3aの打談、21回12bの門詞がある。詳しくは葉氏前掲書P55-56参照されたい。
- 90) 40回本「平妖伝」26回冒頭は、「水」8回の野猪林の場面をそっくり模写している。「残唐五代史演義」10回の安景思牧羊打虎には、「水」23回における武松打虎の記事が多く採られている。
- 91) この問題の重要性については拙論「中国小説の一特徴」「トロント大学季刊」Vol X X X No. 3 (1961年) P325-335を参照されたい。

(1994年 4月25日受理)